

「愛」の詩による出発

——ヘンリー・ヴォーン、国情を冷厳に凝視する

森田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) は、一

六四六年に最初の詩集を公刊した。『詩集』ユウエナリー

スの諷刺第十歌の英訳付載』*Poems, with The tenth Satyre of Juvenal Englished* である。チャールズ一世の専制政治

に反対した清教徒を中心とする議会派と、王党派との間に起きた内乱（一六四二—四九年）の真空中であった。終始王党派の立場を堅持したヴォーンには、頽廢したローマに対するユウエナリーの痛烈な諷刺は、正に自国の現状への適切な評釈に他ならなかった。彼はそれを自ら翻訳して、自作の詩十三篇と共に最初の『詩集』に纏めたのである。そのヴォーンの自作詩を収録順にみてみよう。

*彼については、オリンダのヴォーン讃歌の訳注（4）「続小

考（二）47」を参照

我が気高い友人 R・W⁽¹⁾に

To my Ingenuous Friend, R.W.

我々が死んだ時、さて、もはや 我らの無害な

浮かれ騒ぎ⁽³⁾、我らの才智、そして借金の勘定書が

〈町〉⁽⁴⁾を狂乱させることはなくなる、卑しいしみつたれた

世界が君の財布や私のを借したのにその全てが

使い果たされる時、〈給仕〉や〈年季奉公人〉、

それに召使いの少年たちが立てる思わしい騒音が

我らから離れ去って その姦しい酒場の〈月〉や〈星〉⁽⁵⁾で

は一パイント⁽⁶⁾などは明細を書き留めたりしなくなる時、
穏やかに囁く連中⁽⁷⁾が 扉口で待ちかまえて
我らに忘れていた勘定書を付きつけて

〈骨董商〉を始められそうな程年季の入った

長い請求書を突きつけて ぎよつとさせたりしなくなる時、
〈迷路⁽⁹⁾〉の悲しい大騒動、

逮捕、訴訟、それに〈警察官たち⁽¹¹⁾〉の

恐ろしげな顔が見られなくなり、我らが〈弁護士⁽¹²⁾の髯襟〉

とか〈法服〉の費用を支払わなくてもよくなる時、

こういう〈罰金⁽¹³⁾〉全てが完済され、私が

君という貴重な才人から別れて死ぬことになる時、

我らは懇願しよう この世が大いに親切を示して

我らに一つの墓を与えたまえと、我らは一つの精神を共に

していたのだからと、

そこで(もつと賢い人々なら殆どそう思うように⁽¹⁰⁾)

死後のあの精霊たちが力を揮う所で)

我らの魂たちは出逢う筈で それ故彼らは

(土の暴虐から解放されて⁽¹¹⁾)

力の等しい翼を駆使して(エーリユシオンの⁽¹²⁾)沃野へと

太古からの愛を移し入れるのだ

そこで あの祝福された並木道に彼らは見つけるだろう⁽¹³⁾
更に多くの君の〈天分〉と私の心を、

まず、彼自身の評判の陰に⁽¹⁴⁾

偉大なベンを彼らは見るだろうが、その神聖な〈詩〉を
かの学識高い〈亡霊たち⁽¹⁶⁾〉は賞讃し 群がって

彼の〈歌〉の主題を捕捉する。

それからランドルフは⁽¹⁷⁾ あの至純な幾つかの〈牧場〉で

彼の〈恋人たち〉やアミンタスを読むが

その間 彼の〈サヨナキドリ〉はすぐ間近で

彼のと彼女自身の〈悲歌〉を歌うのだ、

そこから得も言われぬ道路のそばを追い払われ

風通しのよい道を通り 悲しい逗留を経て

彼らは〈忘却の河⁽¹⁹⁾〉の流れる 眠気を誘う野辺へとやって

くるだろうが それは超自然の力が生み出すものなので

(もし〈詩人たち〉の歌うことが真実なら)

その流れはあらゆる悲しみを鎮められるのだ。

ここ 物音のしない木陰の緑の上には

〈恋人たち〉の魂がしばしば見られるが

彼らは生前の不幸な空間の中で

ある偽証罪を犯した顔によって殺害されたのだった。

こういった全てを うっとりとした流れがしばしば訪れて
彼らの〈心配事〉と不機嫌を忘れさせるので
移り気で残酷な性は

死んでも彼らの霊を悩ますことはまずなさそうだ。

それでここで我らの魂は 彼らの新しい様子を

喜こんで大きくなり、飛翔をやめるだろう、

そして今や 最後の思いが現れることになれば

彼らは我らに、あるいはこここの誰に対しても、その思いを

抱くだろう、

とは言えあの花の咲く堤に留まって

あらゆる感受力や心配事は飲酒によって忘れ去るだろう。

という次第で彼らはこういった事柄を論じ合ったので

自分たちの寓話が我らの中では真実なのだと判る筈だ。

〔M・三一四〕

訳注

- (1) Ingenuous 「気高い」「寛大な」。OED が指摘するよう
に一七世紀には、'ingenious'、'才気煥発な」「独創的な」
としばしば混同される語だが、ヴォーンはそれにおそらく
気付いていてこの二語の意味を同時に含めていそう〔M

a・一〇六〕

- (2) Miss Guiney は、ヴォーンがオックスフォード在住中の
親友 Robert Waring だと論ずるが、もっと「らしい」のは
Richard West だろう。『アスクの白鳥』所収の「哀歌」〔本
稿後掲〕の R・W ではないという彼女の見解には根拠がな
い。ラウトン・ヒースでの戦いは一六四五年九月二四日に
起っていて、「哀歌」の証言でその時の R・W は当時二〇
歳になっておらず、ヴォーンは二三歳だった。この詩も、
この詩集の他の作品同様、その戦いの前に書かれているだ
ろう〔M・一〇七〕

- (3) Our harries ninth ヴォーンが「無害な浮かれ騒ぎ」
を強調するのは Feltham, Resolves 所収の「清教徒たちに
つづて」『Of Puritans』の影響とみられる。ヴォーンが
「陽気さ」「cheerfulness」を称揚するのは「陰鬱な」清教徒
への非難であろう〔M・一〇七—一八〕

「浮かれ騒ぎ」'ninth' は「燧石」には一四作品に一五回
使われている。

- (4) Towne ロンドン、もしくは考えられる主要都市の上流
社会。もしこれがオックスフォードでの詩なら、大学人と
は別のその町の市民〔R・A・四四二〕
- (5) Moone, or Starre その旅籠「酒場」の部屋の名〔F・
七〕
- (6) pint = 0.57ℓ 〔英国で〕

- (7) *calme whispers* 浮かれて勘定を払わずに出てゆく客に戸口で注意する従業員 [Ma・一〇八]
- (8) *bills = bills* 多分「矛槍 *halberd*」(法の執行官が所持した武器)と「借金の明細書」*lists of debts*の二重の意味で [F・七]
- (9) *the Maze* 中世の棍棒状の武器である *'mace'*「戦棍、鎗矛」[なら、次行末語の *'face'*と押韻するの]の誤植 [GM] / *'mace-bearer*「職杖捧持者」の意の *'mace'* (*OED mace* 2.b or c) [M初版] / *'disipation'*「暴飲、気散」の意だろう (*OED mace* sb 1b) [M・七〇〇]
- ヴォーンは、Z音とS音との押韻は他にも用いているので *'mace'*の音で *'maze'*を使った。当惑、紛糾、混乱を招く錯綜した仕組、状態、生命の目眩くような渦の意で、「全体の混乱、逮捕の際の騒動」を強調する語を使用した [Ma・一〇九]
- 小路や横丁が網の目のように入り組んだ状態 (*OED maze* 4) [RA・四四三]
- 要するに原文のままでは何の問題もない、巧妙・豊饒なイメージである。
- (10) *There (as the wiser... affect)* 友情は浪漫的な愛同様、あらゆる被造物——その精神力はそれ自体、本来永遠のものである——に共通の精神の親和性を表すものだからという新プラトーン派の考えを、ヴォーンは「」で自らの目的に当
- つづける [Ma・一一〇]
- (11) *Freed from the tyranny of clay* 生命のある存在とは、魂の永遠の中におかれた不幸な一時的な存在であり、肉体とは魂の飛翔を禁ずる拘束力をもつ重さである、という新プラトーン派の概念が、ルネッサンス期の文学には殆ど遍在する「同」
- (12) *the Elysian fields* ギリシャ神話では、エーリュシオンは死後の祝福された魂の赴く所。ウエルギリウスによれば、エーリュシオンの野は、永遠に春の地、新緑の萌えやまぬ地域、常に心地よい森陰に覆われ、咲き続ける花々に美しく飾られ、尽きることなき泉で新鮮に保たれる所「同」
- (13) *they = Our souls* 「四行前S」[同]
- (14) *bayes* エーリュシオンの野に移されたと思われる *Day-trees*「月桂樹」と、その葉から作られた輪で古代人が象徴した「名声・評判」の両義 [Ma・一一一]
- (15) *BEN = Ben Jonson* は、この「詩集」出版の九年前「一六三七年八月六日」に死去 [RA・四四三]
- (16) *The learned Ghosts* ジョンソンの博学だという名声への讃辞。ミルトンは浅学の徒では全くなかったが、自作の「アレク」*L'Allegro*の中で「ジョンソンの学識高き喜劇」につづて書いた [RA・四四四]
- (17) *Randolph Thomas Randolph* (1605.6.15-1635.3.17)。以下、この詩人の喜劇『嫉妬深い恋人たち』*The Jealous Lovers*,

同、牧歌『アミンタス、即ち、有り得ない持参金』*Amyntas; or, The Impossible Downy* 及び、同じく詩「サヨナキ
ゾリの死にござい」"On the Death of a Nighthingale" の
言及 [M a・同]

(18) From thence 四行前の「至純な〈牧場〉」[同]

(19) Lethe 「ハーデース(Hades)」「黄泉の国」の川で、そ
の水は、飲んだ人々に過去を忘れさせた」(OED) [R
A・四四四]

(20) Vertue = virtue, 'supernatural power' (OED virtue sb 9c)
[M a・一一一] [R A・同]

(21) here 一二行前の「忘却の河の眠気を誘う野辺」[M
a・同]

(22) And now the last thoughts will appear, / They'll have of
us, or any here 〃〃の二行の意味「そして今や（我々が
エーリュシオンに到達したら）あの残酷な性にはもはや我々
には、あるいは（強調のせいで）この他の誰にも思い出
されなくなるだろう」[同]／曖昧な二行だがその意味は、
「あの移り気な性は地上に残されて、今や、我々かここに
いる誰かからもらうこととなる最後の思いを得るだろう」
[M・七〇〇]

(23) They (22) のマリラとマーチンの解釈が示すように、
この二人は五行前の「残酷な性」'cruell sex' [後者は「移
り気な性」'Inconstant sex' と言ひ換えてゐるが] だと看

出す。

キニー嬢 (Miss Guiney [The Academy, April 1911,
p.462]) は三行前の 'our soul's' と採り、「それをする
と〃〃の…我々は、墓に取り残されたと描かれる肉体 'bod-
ies' を意味するに違いない」と述べる [M a・同]

ラDRAMも、'our soul's' 説で、忘却の河の水は現世の
存在を忘れさせるという事実を鑑みて、この二行は曖昧な
どではないと断言する。次の作品「愛の交歓」の一三一―
四行目の注(4) 参照 [R A・四四四]／本稿筆者も同感。
詩節が異なり、現れる位置の近さからみても、この代名詞
は「我らの魂」を指すだろう。

(24) sense = capacity for pain or irritation 「苦痛や苛立ちを
受容する能力」[M a・同]

(25) So they that did of these discusse, / Shall find their la-
bles true in us, 〃〃の最後の二行の意味「それでこの寓話
に責任のある彼らは、その物語の真実が我らの中で実証さ
れているのが分るだろう」[M a・一一三]

〃〃の二行は Habington, *Castara* "To Castara" ll.31-3 「そ
れで、こういった事柄は虚構だと論じた／知恵の持ち主た
ちが、我らの中に見出すことだろう、それらはとても寓
話などではないと」を連想させる [キニー嬢前掲] [M・
七〇〇]

当時の酒場の喧騒を、諧謔と機智で活写して、「一つの精神」を共にした青春の友人への愛、友情を、表明した。八音節詩行（「サヨナキドリ」）の出でくる三五行目は七音節）の二行連句五八行のこの作品から最初の詩集は始まる。

愛の交歓 Les Amours

暴君よさらば、この心と貴重品を

それに汝の嘲笑に満ちた眼の勝利を

私は〈天国〉への生贄にして 私の諸々の罪を

御破算(1)にしよう、〈婦人の〉安易な

約束を敢えて信じようとし、変りゆく

顔を真物の喜びとした罪を。

それでも私は出掛ける前に、あの 希望と

恐れの間で私が費やした涙と溜息によって、

汝自身の栄光と 初め(3)て私を汝の力の

奴隷にしたあの時間によって、

私は乞い願うのだ、公正な〈方〉よ、この最後の呼吸に

よって、死後 汝からこの褒め言葉を得ることを。

もし私(4)が出掛けてしまったなら あなたは凶らずも

見ることになろう 私が泊っていたあの冷たい寝床を。

死の際には憎しみは現さないで

私の亡骸アッシュには涙で祝福して下さい、

あの活き活きと生命いのちに輝く眼からどつと流れてくるものが

誰にも見つけ出せない密かな力によって

その冷たい塵を活気イキ付けて

その炎(7)に（死んでいるが）新しい生命を運びさせるのだ。

その温かさは あなたの涙に助けられてもたらずのだから

あらゆる墓石(8)の上に突然

〈緋色の〉花々の泉を、その項垂れている頭また頭は

自らの嘆き悲しむ寝台の上を幕で覆わせるだろう

そして葉の一枚一枚に〈天国の〉命令によって

生命いのちに至るほどにまで〈表象(9)〉が張りつくことになろう。

〈心臓〉が二つ、最初のは槍を阻止したものの、

もう一つは射抜かれて血塗れになったもの(10)、

そして、この心臓には露が宿っていて

如何なる熱を以ってしても消え去ってもらえず

いつまでも残っていて 如実に物語っているのだ

心からの悲しみは 涙で養われるのだと。

こうして〈天国〉は知らせられるし、真実なのだ

あなたが私を殺したのは 私があなたを愛したからだ。

[M・四一五]

訳注

- (1) quit = renounce : acquit myself of 「拒否する、免れる」
(*OED* quit v 5) [M a・一一三] /むしろ、 = to be a return or equivalent for, to balance 「返したり、相当するものになって、均衡を取る」(*OED* 10c) の咎 [R A・四四四]

- (2) easie faith = lightly-given promise 「気軽に与えられた約束」(*OED* faith sb 8) [R A・四四五]

- (3) that houre...inslav'd me to thy power ヴォーンは(この)で唯、詩の上でだけだろうが、この婦人に対する語り手の愛情を、自分の誕生時の星から発する影響力のせいになっている [M a・一一三] /その根拠は分らないが、ヴォーンが、この詩人、もしくはそのベルソナ「語り手・作中人物」が恋に陥った時間に言及しているのは確か [R A・四四五]

- (4) If when I'm gone ...where I lodged bee 最初の「私」は去っていった魂を、二番目の「私」は肉体を指している。ヴォーンのここでの語法は、この直前の詩の五四行目に光を投げている。ここでは「彼ら」は魂を、「我ら」は肉体

を指している [R A・同]

- (5) This influx...which none can spie この、婦人の眼から発散する密かな、出所の分からない愛の光という概念は、「エテシアへ(テイマンダーに代って) 最初の一瞥」「続小考(三) 26」の四一―四六行目に、また殆ど同じ考えは「彼から別れて振り返っているエテシアへ」[同・31]の

一―六行目に現れている。この概念は占星術から借りているもので、眼は星に、愛の力は星の影響力に、類似するとされる。この類推への興味深い注釈は「星の降る夕べ散索中のアモレットへ」[本稿後出]の一一―二行目にみられる。

尚、「冷たい塵」を活気付ける浪漫的な愛という考えは、「燧石」の「イエス泣き賜う(五) B」[小考(六) 31]の九―三行目「…愛の涙よ…それが塵を動かし…」と興味深く平行している [M a・同]

- (6) informe = pervade as a spirit, animate (*OED* inform v 3 b) [R A・同] / = inspire [M a・同]

- (7) flames 愛の炎 [M a・同]

- (8) O're all the tombe...mournfull beds エンデュミオンの墓を描じた Drayton [Michael, 1563-1631] の次の一節と比較の(つと)「この栄光に満ちた寝台へのカーテンとなつて／一面に広く飾られているこの上なく珍しい花で」 [M a・同]

- (9) to the life = exactly drawn 「正確に描かれた」 [R A・

同]

(10) The second, shot, and wash in blond の一行にマリ

ラは、『燧石』の一六五〇年版の標題ページの前に付けられた有名な表象の前触れだと詳述する「Ma・一一五」が、ラドラムは、この表象は、最初の心臓は不親切な婦人を表し、二番目のは拒まれた恋人を表すようにみえると言う
[RA・同]

二作目は「暴君」『Tyrant』[最初の作品(四九行目)に言う「移り気で残酷な性」'thinconstant cruel sex']、即ち「私」の愛する女性との愛が主題である。'Les Amours'は「恋愛事件」「情事」の意だが、拙訳はそうしなかった。三、一〇、二五、三三行目は九音節、六、三〇行目は七音節、他は八音節詩行で、二行連句三四行の作品。

アマレットへ⁽¹⁾ 溜息 To Amoret The Sigh

素早い〈溜息〉⁽²⁾よ お前の暖かな翼に乗せて

この〈伝言〉を持って発ってゆき

告げておくれ アモレットに、お前の空中の旅が
運んでくるものに微笑んで歌う人なのだから

お前は私の心からやって来たばかりなのだ。

告げておくれ 私の愛しい敵に、私には
もう 送り込むような密偵たちはいなくて

ただ一人か二人

私が死ぬおよそ二、三分前に

彼女の白い胸に委ねたい者がいるだけだと。

それからそっと囁いておくれ⁽⁴⁾ あの神聖な〈泉〉で⁽⁵⁾

そこでなら彼女のために 私は死んでしまってもいい、

そのうちにあの水の〈妖精たち〉が〈花々〉を

彼女が苦しめてきた者を癒すために持つてきて

私の誠実と愛について歌ったのだった。

願うのみ もし私のアマレットが、もし彼女が

将来これを読んでくれたならと、

どれ程彼女の美しさが私を悩殺したことをか。

心の底からそのとおりに違いないのだから

もしも彼女が、死んでしまった私を唯、愛してさえく

れるならと。

[M・五—六]

訳注

- (1) この詩群のアモレットは、ヴォーンの最初の妻キャサリン・ワイズ (Catherine Wise) にあてられている。『タレイアー』所収のオリンダの詩「続小考 (二) 45-46」の九一〇行目も、アモレットが単に想像上の人物ではないことを示唆している。更に『タレイアー』のエテシアも同人かも知れないとハッチンソンは考えている [H・五〇—五四] が、James Simmonds, "Henry Vaughan's Anonnet and Elesia" *PQ*, XLII (Jan. 1963) pp.137-42. は「同一人物ではないという異なった見解である」 [RA・四四五]
- (2) Nimble Sigh on thy warme wings の一行、Haddington, *Castara*, "To Cupid" の「暖く飛びゆく素早い少年よ」と比較せよ [M・七〇〇]
- (3) spies アモレットを「愛し敵」 'lovely foe' だとう暗喩を導く。初期の用法での 'a spy' は「特に、変装して果敢に敵陣や敵地に乗り込む人」を指すが、ヴォーン of 'spy' は、そういう暗喩とは別の方向で有効な諜報活動をするという意のようだ。おそらく彼は、密偵とは、伝言出来ないいうちに敵の居場所を探り出さなければならぬ、と思っっているのだ。その点から言えば、マリラが引用する [Ma・一一五] カルーの一節は適切だ、「行け、汝 穏やかに囁き続ける風よ／この溜息を運んでおくれ、もしも汝が／私の残酷な恋人が安らぐ所を見つけ出すなら／それを

- 彼女の雪白の胸に投げてくれ／そうすれば私の欲望で燃え上って／それは彼女の心に火をつけられるかも知れない」 (Carew [Thomas, 1582-1639?] "A Prayer to the Wind") [RA・四四五—一六]
- (4) whisper 密かに談話するという概念、内密の取引という含意で「探索」の下に覆われた、を示唆する [RA・四四六]
- (5) by 主に場所「ほとり、そば」を指すのではなく、囁かれていることの誓約めいた質に言及しているようだ。語り手は自分の提供する取引の誠実さを証拠立てたいのだ。ヴォーンはこの語の使い方は本来の場所の意を保持しており、そこでの誓約は何か神聖なものの前で、ここでは「あの神聖な〈泉〉」 'that holy Spring' の前で、なされるわけである (OED by 2) [RA・同]
- (6) tried = afflicted (OED try v 10) [同]
- 第三連は、オウイデイウスの『変身譚』の寓話「ナルキッソスが妖精エコーの愛を拒絶するので、ネメシスが彼を水溜りに映る自分の姿を恋するようにしむけて罰する」 (Ovid's *Metamorphoses*, III.339-510) を反映している [Ma・一一六]

この小篇詩にさえ、ヴォーンの他の大半の作品に観られるのと同種の有機的な統一性が在る、とマリラの言う [M

a・一「五」作品で、この一篇を皮切りに（アモレット詩篇）が始まる。

なかなか愛情を受け容れてくれずに「私」を苦しめるアモレットへの愛の「伝言」を、自分の溜息に托すのである。異なる韻をAとBで表示することにして各連の押韻の型と音節数は次のようになっていて、まるで溜息の浮遊の姿のようにだ。

A 7	A 7	A 7	A 8	A 8	A 8
B 8	B 8	B 8	B 8	B 8	B 8
<hr/>					
A 8	A 8	A 7	A 7	A 8	A 8
B 8	B 8	B 8	B 8	B 8	B 8
<hr/>					
A 8	A 8	A 7	A 8	A 8	A 8
B 8	B 8	B 8	B 8	B 8	B 8

恋愛中の、彼の友人に

To his Friend Being in Love

〈恋する人〉に頼んでみよ、汝が死ぬ前に、哀れな一息を汝の唇からこつそり洩らして、彼女に汝の〈死〉のことを告げてくれと、

老いほれ⁽¹⁾〈崇拜者⁽²⁾〉よ！黙っていて汝の慈悲深い〈聖者⁽³⁾〉に来てもらえるのか？ それともキューピッドが汝の弱々しさのせいだ矢を一本放ってくれるだろうか？

試すのはやめよう⁽⁴⁾

病気の眼のこの沈黙のままの〈求愛〉を、暴虐の際には賢く振るまおう、彼女は十分知っているのだ。このことは、しかし汝の内密の誓いの芳香は別だ、⁽⁶⁾汝の眼を見てどっと噴き出して裏切るのだ、⁽⁷⁾

汝の傷ついた心なら払う筈の犠牲を、

彼女に頼んでみよ、愚か者よ、彼女に頼んでみよ、言葉では人を動かせないとしても

汝の涙の言語なら彼女が愛する気になれるかも知れない。⁽⁸⁾

だから私から素早く流れてゆけよ、そして君たちが⁽⁹⁾

彼女の乳房の上にもっと暖かな雪となつて落下するなら⁽¹⁰⁾

おお君たち悉くか⁽¹¹⁾

何か不思議な〈運命〉によつてそこにしっかりと明白に留ま⁽¹²⁾

つていてくれるように⁽¹³⁾

私の〈悲劇〉の大好評〈本〉として。⁽¹⁴⁾

君たちが彼女を口説き落さず、これが読まれるようなら⁽¹⁵⁾君たちをすっかり凍てつかせた寒さが私を打ちのめして死に到らせたのだよ。

[M・六]

訳注

(一) Doating = doing 愚か者である、と愚かにも愛してい

- る。②の二つの関連した意味で [M・七〇〇]
- (2) *Idolater* 女性だから聖者として崇拜する。たとえ聖者は神によつて創られた存在にしろ [R・A・四四六]
- (3) *Saint* 彼女のこと、汝に「崇拜」させるのだから。
- (4) *leave to trye* = stop experimenting with [R・A・同]
- (5) *Wifty to tyranny* = clever in exercising. 'tyranny' は動詞 'tyrannize' と同じ使われづるのかも知れなく [M・七〇〇] / = wise in the ways of exercising tyranny [M・a・一七] / = clever in tyrannizing [R・A・四四六]
- (6) This 二行前の 'This silent Courtship of a sickly eye' [M・a・同] [R・A・同]
- (7) *private vows* 自分の苦痛は告白したりしない、という彼の密かな誓い [M・a・同]
- (8) 一行目からこの二行目までは、「なぜそんなに青ざめ血の気がないの？愚かな恋人よ」と始まるサックリング [Sir John Suckling, 1609-42, 英国の詩人、劇作家、王党派] の「歌」"Song" [五行詩三連の詩] に示唆されている。G. C. Moore Smith の見解 (MLR, XI [1916], 245) を示持する [M・a・一一六—一七]
- (9) *me* くれによつてこの詩全体は、友人によつて語られているのだということ、もしくは一三—一八行目は、一—二行目の呼び掛けに対する友人の応えだとの示唆になる [M・七〇〇]

- (10) *you* 次の (12) から複数形だと分る。= thy tears. 涙
- (11) *warmer snow* への撞着語 (oxymoron) は強く凝縮された概念の具体化である。その白さと、語り手への婦人の冷淡さとの双方によつて、乳房は「雪」になるが、その譬喩での冷たさにも拘らず実際は暖い [M・a・一一七]
- (12) *all = all the tears* [M・a・同]
- (13) *there = on her breasts* 「彼女の胸に」。自明か？
- (14) *The much lov'd Volume of my Tragedy* 分かり難い句。涙が一冊の本とか記録になつてこの語り手の悲劇の物語を保持する、という譬喩か [本稿筆者も同解釈]。思うに、彼は、この悲嘆を赤裸裸に表白した記録を、死んでから愛する、というのだろうか、と同時に、この「本」は彼の愛の強力な表明から成るのだという考えを弄んでいる [M・a・一一八]
- (15) *you = thy tears*. 彼女の乳房の上に落ちて留まっても涙が彼女の心を動かせないということは、涙を凍てつかせたわけで、落涙による哀願も無効にするような彼女の冷たさが、私を死に到らせた、という結論。

この詩の語り手は詩人自身だ、とマリラは言う。第一パラグラフでは、慣習上暴君として振る舞う婦人への、心身を擦りへらす愛を十分に告白すべきか否かで踴っている自

暴自棄の恋する人を描き出す。第二パラグラフでその葛藤を解決する。結末の二行に、この詩が提唱しようとする本當の態度が十分表れていると「Ma・一六」

何だかごつごつした韻律の一二行から後の滑らかな調べに、マーティンは、全篇が友人の語り、もしくは、第一パラグラフの「彼」の呼びかけに第二パラグラフで友人が応えたかしたものと、と解する「訳注(9)」が、標題で作者自身を「彼」と客観化している作品はヴォーンには他に何篇もあるのだ、これは友人に寄せた詩の体裁を採った作者自身「彼」の語り、独白と、マリラ同様筆者も見做したい。自らを「汝」と呼び、「老いぼれ(崇拜者)」「愚か者」と自嘲気味に自己励起の思いを込めて呼び掛ける。第二パラグラフで作者は自らを、「汝」から一人称の「私」に切り替えて、自分の流した涙に彼女を口説く(win her)ことを托すのだ。ヴォーンらしい劇的な大変凝った作品。一〇音節詩行二行連句一八行の詩。

愛情を相手に伝える使者が、前作の、自分の唇を洩れ出る溜息から、この詩では自分の眼から流れる涙に変わる。涙が、その涙を流す当人の思いとそれが遂げられない物語の本になる、という譬喩が奇抜で鮮明な一篇であろう。

歌 Song

アミンタス、⁽¹⁾ お行き、そなたは元へは戻れない、
そなたの忠節、心は運命に横切られた、⁽²⁾

〈愛〉は始まらない方がよいのだ、

〈愛〉⁽³⁾ が愛するようになるのが遅すぎるのでは、
彼女が 隠れている火を明言したり

心を縛っている結び目を示したりしたら

私は最初の欲望を満たせられるから

私たちは唯、会うだけで別れたことだろう、

でも 〈暴君〉よ、こんな風に男たちを殺害して

〈恋人の〉無害な血を流して⁽⁴⁾⁽⁵⁾

彼をまたもやあの炎で火炙りにするなんて、

それには彼は初めのうち 抵抗したかも知れなかった、

それでも美しいクローリスが⁽⁶⁾ あれ程神聖な露に

それほど清らかに優雅に涙を流すのを見た彼は

それは空涙だと敢えて考えたか、〈天使〉の

顔に 〈反逆〉を探し求めたかしたのだ、

これは彼女の 〈手管〉⁽⁷⁾ なのだ、唯 真実ではある、

私たちの喜びが悲嘆や恐怖で台無しにされたのは、
 それでも彼女は露で圧しつぶされた花々を好み
 涙を流しながらも成長し、意気盛んだ、
 こういうことを「残酷な人」⁽⁸⁾、そなたは行った、そうして
 あの「顔」は、多くの召使い⁽¹⁰⁾を殺してしまつた。
 尤もその目的は、我らを滅ぼすことではなく
 我らの苦痛によって栄光に浴そうとすることなのだ。

〔M・六一七〕

訳注

- (1) Amyntas 語り手は自らに呼び掛けてゐる。この名前は、おそらくランドルフの牧歌劇 (Randolph, *Amyntas* [1638]) の作中人物で、牧夫への恋で狂つたアミintasに示唆されたものだろう。「我が氣高い友人 R・W に」〔本稿前掲〕三三—三六行目参照〔Ma・一一八〕
- (2) *cross* (= *crossed*) = *thwarted* 「妨害された」〔同〕
- (3) *Love* この箇処のように男性の浪漫的な愛情の擬人化はかなり普通にみられる〔同〕
- (4) *harmlies* 前行の「殺害する」の「対照法」, *antithesis* 「一文中に反対の意味の章句を対立的に置き、意味を鮮明にする方法」〔同〕

- (5) *bloud* どういう読み方をするにしろ、「血」(當時、色々な感情の存在する所と思われていた) は「炎」の先行詞であり、一つの可能な読みとして、暴君「彼女」がその恋人を「最初の欲望」〔七行目の '*first desires*'〕のままに愛で熱くなつた血で新たに燃やしたのだと示唆する〔M a・一一九〕

- (6) *Chloths* ギリシヤ神話の花々の女神 (ローマ神話では *Flora*)。Boreas, *Zephyrus* の両者が彼女の愛を競うが、結局後者が選ばれた。ルネッサンス期の愛の詩では恋人や愛人を表す名前であるのが慣習〔同〕

- (7) *This* 三行前の「清らかにも優雅に涙を流す」と (*her weeping 'with such pure grace'*) 〔同〕

- (8) *This Cruell thou hast done*, の *Cruell* 「残酷な人」(*OED* *cruel* a 1 b)、「残酷に」(*OED* 同 5)、「残酷さ」(*OED* 同 sb) 「この場合 '*This*' は形容詞 「こういう残酷さ」の三つの意味が重なっている〔Ma・一一九〕〔R A・四四七〕

- (9) *and thus... by our paine* (ここから以下最後まで)の意味、「そなたは多くの恋人たちを殺し、我らを滅ぼしたが、それが目的ではなくむしろ、自分の行為のせいで愛を鼓舞する人としての名声を得ようとしたのだ」〔Ma・一一九〕
- (10) *servants* = *suitors* 「(女性への) 求愛」〔婚〕者たち〔同〕

ここで突然、字体の異なったイタリック体の作品が現れる。〈アモレット詩篇〉の全体の効果を挙げるためだろう。ランドルフの作中人物アミンタスに呼び掛ける形によって、この詩集の最初的一篇と改めて関連づけられて、この詩集の統一性が強められる。詩型も少し変化がつけられて、この作品は、A B A B C D C D…と交互に押韻してゆく八音節詩行二四行から成る。そして、アモレット詩に戻ってゆく。

星の降る夕べ散索中の アモレットへ

To Amoret, Walking in a Starry Evening

もしもアモレット、あの輝くばかり美しい〈眼〉⁽¹⁾が
光が最初に生れ⁽²⁾

〈夜〉⁽³⁾が死んだ時に
あなたが探り出すあの昔の火と共に

高所で受け容れられている
姿かたちと景観を振り撒いていたなら

私たちは疑った⁽⁴⁾かも知れない その広大な〈輪〉⁽⁵⁾の中で
この黄金色に輝くものらと

火となって燃える物語群の間にあって
〈太陽〉は〈王様〉⁽⁶⁾で

〈昼日中〉⁽⁷⁾の導き手だったのか

とか それよりもっと明るいあなたの眼が支配してい
たのかと。

しかしアモレット、そういうのが私の運命なので

もしそなたの顔を 〈星〉⁽⁸⁾が

遠くから照らしていたなら

私はそなたと私との間の

あの状態にあって

何か運命づけられた共感を抱いても尤もなのだ。⁽⁹⁾

確かにそのような協力し合う二つの精神を⁽¹⁰⁾

偶有性⁽¹¹⁾とか立場が

これ程に結びつけはしなかったし

如何なる距離も限定したり

緩めたり⁽¹²⁾、逸らせたり出来ないので

一方は、もう一方のために、企画⁽¹³⁾されたのだ。

[M・七一八]

訳注

- (1) that glorious eye アモレットの眼 [RA・四四七]
 - (2) In the first... death of Night 「創世記」1・2・3 「闇が深淵の面にあり…神は言われた、光あれと、それで光が生じた」の反響 [Ma・一一〇]
 - (3) those elder fires = the stars. 第一連の意味、「アモレットよ、もし世の初めに君の輝かしい眼が星に造られていたなら」[同]
 - (4) suspect = doubt (OED suspect v 1 c) の意味では稀な使い方で、一六九八年の一例のみ [同]
 - (5) Ring 〇で指すのは「the Milky way」[銀河系]でこの語はヴォーンの他の詩『燧石』には単数形で六回、複数形で三回使用される [T・一六六] での意味は持つていない [Ma・同]
- マリラの言うようにはヴォーンは考えていなかったと思う。彼は多分、プラトーンの『ティマイオス』の宇宙の循環を念頭に置いていたのだ [RA・同]
- (6) stories ヴォーンは多くの星や惑星の名称に保持される古典の伝説、あるいは占星術師が星々の中にあると読み取る筈のものを考えていたか、もしくはマリラが述べるように [Ma・一一〇]、ヴォーンは、新プラトーン流、あるいはプロトレマイオス風の宇宙の層とか段階「地上、天

- 上、精霊界」を念頭に置いたものか [RA・四四七]
- (7) brighter 太陽より明るい。第二連の意味、「黄金の輝きや火のような物語群の中に置かれて一層明るくなった君の眼とか太陽があのか輪」の中で至高の力になっていただろうなどとは思わなかったかも知れない [Ma・同]
 - (8) sympathetic = affinity, fellow-feeling 「親近」「和」「感」[仲間意識] [Ma・同] [RA・同]
 - (9) conspiring = harmonious 「調和のとれた」(OED conspire v 3), = concurring 「同意し合う」[RA・同] [Ma・同]
 - (10) accident 非本質的な属性、もしくは資質という哲学上の意味で [RA・同]
 - (11) sight 単なる、物としての外観 (OED sight s1 3) [RA・同] だけではなさそう。
 - (12) Start = loosen, displace 「離す、置き換える」(OED start v 21) [RA・同]
 - (13) decline = divert (from one another), cause to deviate 「向きを変えさせる、そらす」(OED decline v 11 b and c) [同] /最後の三行は、「親近性は永続するものだ」という考えを強調している [Ma・同]

アモレットと「私」は、協力し合う二つの精神であり、互いに相手のために企画された二人なのだよ、と強調して

そうあることを希った求愛詩の、凝った形を我々は味読したい。詩型も変化に富む六行詩四連二四行の詩。異なる韻をABCと表示して押韻の型と音節数を順に示せば次のようになる。

A9	B6	A4	A8	A4	B6
<hr/>					
A8	B7	B4	A8	C4	C7
<hr/>					
A8	B6	B4	A8	C4	C8
<hr/>					
A8	B7	B4	C7	C4	A8

彼から去ってしまったアモレットへ

To Amoret gone from him

空想フアンシ、と私は、昨日の〈夕方〉歩いていて

アモレット、君のことを私たちは話題にしたのだった、

〈西方〉が丁度その時 〈太陽〉を盗んだばかりで

彼の最後の赤面が始まっていた、

私たちは座って、気付いたものだ、全てのものが

彼の不在を嘆く有様に、〈泉〉が

彼がここに居た間は微笑み、彼の光線の周りに

波立っていたが 今や自らの流れを遮っている 〈様子〉に

も、

彼女の表面の気紛れな〈渦〉は

前より少ない騒音と一層軽快な優雅を教えられた、

そして緩やかな悲しい水路をとって流れ

両岸に不満を囁いていった、

無造作に並んだ花々は それぞれの

芳しい胸を彼の頭へと広げて

公然と ほしのままに〈抱擁〉しながら

彼の光を放つ顔をもてなしていた、

不在の友人たちが〈西方〉を目指し、

あの弱々しい反映を楽しむように。

もし だから 感覚が全くなって感化力(3)の

緩やかな縁えんじしか持たない〈被造物〉が

（尤も運命と時とが 毎日彼らの愛を

構成する要素となるものを取り去るのだが）

あれ程広大な距離を隔てて同意(5)できるのなら

どうして、アモレットよ、どうして私たちがそうしては

いけないのか。

[M・八]

訳注

(1) curl'd = rippled (OED curl v. 3) ヴォーンは自然の描写に好んでこの語を使う [M・一二二]

- (2) careless = artless because uncared for 「世話されてないのじ作意なく」(OED careless 4a, b) [RA・四四八]
- (3) influence 「ローマ人への手紙」第八章第十九節「小考(八) 37-39」の1-2行目「彼らは全く〈感じ〉／ないのか〈感化力〉は？」とその訳注(2) 参照。

(4) Those things that element their love 彼らの愛に相応しい特別な状況 [Ma・一二三] / 彼らの愛にそれが備えている実体の全てを与える具体的な事柄。括弧内の二行は、ダンの「告別の辞・悲嘆を禁じて」"A Valadition: Forbidding Mourning"の一二一-一六行「月下の世界の鈍い恋人の愛は / (その魂は感覚なので) 認められないのだ / 不在を、何故ならば不在は取り去るからだ / 愛の構成要素となるものを」を参照 [M・七〇一]

(5) agree 共感、あるいは調和の取れた状態になる [M a・同] [RA・同]

八音節詩行二行連句二四行の作品。三―四行目は、西に沈む直前の太陽の様子、夕照、夕焼けの姿を描写したもので、形而上派詩人としては序の口の表現である。「私」がアモレットを語り合う相手である「空想」、それが以下のこの詩の内容、というわけであろう。面白い結構・構想の作品ではないか。夕焼け、残照で、恋しいアモレットが去

った状態を表現する。遠く離れた〈被造物〉と万物を育む太陽とが「同意」、即ち共感し合い親和できるように、私たちもそうしようよ、と訴えかける詩である。作中の「彼」は「太陽」を、「彼女」は「泉」を表す。

アモレットへの歌 A Song to Amoret

もし私が死んで、私の代りに

誰かもっと瑞々しい若者が心して

君を新たな火⁽¹⁾で暖め、私が後に残して

きたあの〈両腕⁽²⁾〉を優雅にするなら、

彼が〈太陽〉のように誠⁽³⁾実で

その〈天体〉と堅く結ばれているなら、

彼の血が純潔で穏やかに〈四月〉の

限りなく心地よい涙のように流れるなら、

あるいは彼が金持で、それを積み上げ

〈大地〉を広々と共有して⁽⁴⁾

神の慈愛を安物にして

己が黄金の誕生に媚を売らせるなら、

こういう〈術〉⁽⁵⁾が全てあつても 私は信じはしない、

(彼が君のものになる筈はなからうが)

その強力な〈女誑し〉⁽⁷⁾が 私のと同じ程の

豊饒な心を与えられるなどとは。

富と美は 君は見出せるかも知れない

そして私より立派な男性たちも、

でも 私の本当に断固たる心に

彼らは決して近づけはしない。

というのも 私は一時間愛することも

一日中欲することもなかったが

私の魂を籠めて上から⁽⁷⁾

この果てしない聖火を抱き締めていたのだから。

〔M・八—九〕

訳注

(1) fires = love. 「歌」〔本稿前掲〕の五行目にも同語〔M

a・一二三〕

(2) Armes 「腕」で魅力に富む女性を表す提喻。

(3) the Sunne...weddéd to the Sphere プトレマイオス

(Ptolemy) の体系では、惑星の各々は地球の周りを回転する天球の一つを占有していた。太陽は惑星の一つと考えられていた (OED sun 1) 〔Ma・同〕〔RA・四四八〕

(4) Could make...cheape...golden birth 「愛情を、富の意を迎えるような安っぽいものにする」。「cheap」に「安売りをする」という意の今は廃れた動詞とそこから派生する「媚を売る」との掛け言葉になつていよう〔Ma・一二三—一四〕

(5) Arts = artificial expedients 「人為の方策、便法」〔Ma・一二四〕

(6) resolved = fixed, settled 「確固とした、定まった」〔同〕

(7) But with my soule...holy fire ハントントンの「カスターラへ、彼女を愛した理由を尋ねつ」(Habington, "To Castara, Inquiring why I loved her" 28-29) の「しかし上から何か／理性の導きなしにこの火を撃ち出した」と、同じく「愛の記念日」("Loves Anniversary" 14) の「しかし純潔な愛は甘美な果てしない火だ」を参照〔M・七〇—二〕

ケネス・アロット (Kenneth Allott) は「カスターラ」の編著の中で言う、ヴォーンは次の「世界へ、愛の完成」("To the world, The Perfection of love" 33-35) の「プロ

メーテウスのように我らが天から火を盗んだ時、それは果てしなく完全なもので、年は取っても衰えないかも知れない」を念頭に置いたかも知れないと「RA・同」

八音節行と六音節行とが交互に押韻する四行六連の作品である。

最終連は無論、真物の愛は神聖な相性の良さのことだと主張。この同じ新プラトーン派流の概念が具現化されているのが〈アモレット詩篇〉の各々だが、とマリラは続ける、これは何もヴォーンに特有の観念ではなく当時の哲学思想の基本であり、ルネッサンス期の詩のありきたりであると「Ma・一二四」。観念そのものは当時の常套かも知れないが、〈アモレット詩篇〉は、ありふれた観念の主張ではなかった。それをさり気なく「使い」ながら、この詩にも「私の本当に断固たる心」とあるように、単なる我執ではない、頑冥でない「本当に」断固たる、「私の」心の主張だったと思われる。それは、各作品の書きさま、展開の姿、中から聞こえる「語り手」の声の揺らぎ、奇妙な韜晦ぶりが、証しているよう。

あゝ悲歌 An Elegy

確かに私は身を滅ぼした、それでも死ぬ前に

こういう溜息や涙は 遺産にしたい

後の〈恋人たち⁽¹⁾〉に、そうすれば私を思い出しながら⁽²⁾

あの 今行き暮れている病める炎が 彼ら⁽³⁾のもっと

暖かな溜息に煽られて甦り、立証してくれるかも知れないから 彼ら⁽³⁾の中での〈愛〉の〈輪廻転生⁽⁶⁾〉を。

私だったのだ(他の連中が軽蔑した時) 君が正しいと断言

したのは、

だから間違いない 呼吸が粗末な空気を豊かにして

〈薔薇〉を君の頬に添えて 〈花の女神⁽⁷⁾〉に〈泉〉の

榮譽を悉く備えたお付きの〈妖精たち〉を動員させて

そなたの顔にかしずかせて 私⁽⁸⁾の心に与えたのだ

もっと鋭い矢を放つというキューピッドにさせた誓約を、

あの眼⁽⁹⁾を武装させて私自身に向けさせるために。私の

お陰なのだ そなたの舌がああ魅惑に充ちた和声を持って

いるのは。

私は〈御使⁽⁶⁾たち〉にあの上方の喜びから誘いかけて

彼らが住処の天体を去ってそなたの声を聞くようにし向けて

たのだ。

私はあの〈インド人〉⁽¹⁰⁾に 自らが費やした時間を呪わせて
己の真珠を探させ、賢くも自らの以前の
愚行を後悔させ、そなたの肌のもっと明るい光沢に

魅了された罪を 告白させたのだった。

私は借りたのだ、風の中でもゼビュロスといふ

穏やかなほうの風と 〈泉〉の柔和な魂と、⁽¹²⁾

そして（あの頬を一層新鮮な雅びな空気に晒すために）

留まらせたのだ その温かに（生命を吹き込む者たち）を

そなたの顔に。

オオ！ ジャム サティス

〔M・九—一〇〕

訳注

- (1) after-Lovers 将来の恋人たち [Ma・一二四]
- (2) that remembering me... of Love 〃〃からの四行の意味、
「彼らは私を思い出しながら、我らの終わった恋愛の消え
た炎が彼らの新たな恋愛の炎の中に魅了たのを目撃して、
愛の輪廻転生のようなものの存在を理解してくれるだろう
から」 [Ma・一二五]
- (3) their, (5) them, 共に after-Lovers

- (4) love おそらく 'live' の誤植 [GM] [M・七〇—
「F・一五」 [RA・四四八] / 原文のままで = revive 「甦
る」「生き返る」 [Ma・一二四] 本稿筆者このマリラ説に
賛成。love' のままで意味が取れるのだから。

- (6) Metempsychosis これは、大英博物館本 (C.56.b.16)
と Harvard 本の読みであり、この『詩集』の一六四六年版
の Huntington 本と Illinois 本のテキストは 'Metamorpho-
sis' 「変容」であり、そちらを採りたいとフォォーゲルは言
う [F・一五] が、前者（本稿底本）が意味が合う。詩人
の愛が再び愛し初め、後の恋人たちの愛を活気づけるの
から [RA・四四九]

この語は、死の時かその後、魂が亡骸から生きている肉
体に転移するという考えを指す。これはルネッサンス期の
馴染みの文学を継承するものび (Donne's "The second
Anniversary" の主題など)、ギリシヤの哲学者ピュエータロ
ラス [Pythagoras c582-c500 B.C.] に由来する。ウォー
ンはここで、皮肉目的で使用している [Ma・同]

- (7) thy 二行前のフロラ (Flora) の。
- (8) and gave my heart... against my selfe 〃〃の三行の意味、
「私の心を限りなくキュービッドに与えたら、彼はお返し
に一層鋭い矢を私に向けて放った」 [Ma・一二五]
／「私は、君を私に惹きつけるもつと有効な武器を購入す
るために心を賭けた」 [RA・同]

(9) those eyes 眼が愛の力の源だという考えはルネッサンス期の慣例である。「愛の交歓」[本稿前掲]の一七一—八行目参照 [Ma・同]

(10) the Indian 作者は無論、これが東あるいは西インド諸島かインドの土着民を指すと受け取られるものとして意識している。以下の四行、ダンの「悲歌一九、就寝」(Eleg. XIX, Going to Bed¹, 119-21)「おお我がアメリカ、我が新発見の地／我が王国：／我が貴金石の鉱山、我が帝国、／このように汝を発見して私は 何と祝福されていることか！」と、カルーの「彼女自身の美しさを理不尽にも信頼しない A・D〈」(To AD, Unreasonable, Distrustful of her Own Beauty²)の中の詩句、「私はあれ程のインド人の愚か者とは取り引きしない／黄金、真珠、貴金石を売ってビーズやペルを得ようとするようなのは」を参照 [Ma・一二五—二六]

(11) Zephyrus 西風(本邦の東風「こち」に当る)の神で、九行目のフローラの夫 [Ma・一二六]

(12) soules 即ち breezes 「そよ風」。この語は抽象的な物の中に在る生気を与える性質のものを表示するのにはしばしば用いられた「同」

(13) Oh! jam satz 「おお、もう沢山だ」 Martial, Epigrams, IV, 91.1 'Ohe, jam statz est, ohe, libelle' Walter C. A. Ker, tran. (17 Loeb Library) 'Ho, there, Ho there, 'tis now

enough, my little book と、ホラーティウス『諷刺詩』(Quintus Horatius Flaccus, 65-8 B.C., Satires, II, 5, 96) 参照 [GM] [M・七〇一] [L・一五]

全て一〇音節詩行二行連句(擬似音を含めて)二四行の作品。

この詩は、とマリラは言う、この『詩集』の他のどの詩にもましてダンの影響がみられるが、素材そのものは当時の大抵の愛の詩同様ありきたりながら、概念の点では相当(以上だと本稿筆者は思うが)独創性があるし、その素材としても独自の自家葉籠ぶりを示していて、サククリング、ヘリック、カルー、あるいはベン・ジョンソンの愛の詩を樂しむ読者に不満を覚えさせたりは決してしない芸術上の効果を収めている。標題は詩自体と同様にアイロニーを帯びたもので、この作品の性質は、終わった情事についての「悲歌」であると [Ma・一二四]

唐突に「インド人」が現れたり、とにかく込入ったひねった表現での特殊な把握は、この作者の面目躍如ということだ。

狂想詩 A Rhapsodie ⁽¹⁾

「グローブ亭」⁽²⁾で何人かの友人と会っては折々書かれた一篇、頭上には「曇った空」と幾つかばらばらと散った「星々」が、側面には「風景」「丘陵」「羊飼いたち」と「羊」が描かれた「部屋」で

Occasionally written upon a meeting with some of his friends at the Globe Tavern, in a Chamber painted overhead with a Cloudy Skie, and some few dispersed Stars, and on the sides with Land-scapes, Hills, Shepherds, and Sheep

〈闇〉と〈星々〉、真昼の！ それで我らの活発な空想が働いて、今が夜だと信じてしまふ、〈旅籠〉に〈太陽〉は不要なのだから〈看板〉のためならともかく、

そこでは豊饒な〈煙草〉と燃え盛るロウソクが輝き王公の才智に富む〈サクク酒〉⁽⁴⁾と〈詩人の〉魂があり彼がその容器をびかびか飾るよりもっと明るい〈太陽〉が幾つもある、

まるでその〈壺〉⁽³⁾と〈詩人〉⁽⁴⁾が同意したかのように〈サクク酒〉が両方を共に〈照らすもの〉⁽⁵⁾になる筈だと。眉毛が巻き毛になったあの人工の〈雲〉⁽⁶⁾が時刻がもう遅いと告げており、下方のあの青い空間はあまたの〈星々〉で燃えている、〈ほら〉⁽⁷⁾、ぱっと現れ出る様といったら

音もなく丘陵の上を閃きながら語り知らせているよ〈夕べ〉を〈平地〉に、そこでは遠くから放たれた

彼らが黙って挨拶を送っている、偉大な〈星〉⁽⁷⁾として。

その部屋は（思うに）どんどん暗くなってゆく、そして空気は一層悲し気な色合いを帯び、曇りを増してゆく、それともそれは〈給仕〉の腕前ではないのか、彼には

我らの眼をそれ程晦ます〈技術〉はないのか、我らにはパイントとクォートの区別⁽⁸⁾がつかないのか？

否、否、夜なのだ、眼を凝らそう、どこで陽気な〈田舎者〉⁽⁹⁾がメーメー啼く己の羊の群を寄せ集めて〈丘陵〉⁽¹⁰⁾を立て

ち去るのか。

耳を澄まそう！ 彼の素朴な笛が 静まり返った空気を掻き乱す⁽¹¹⁾有様に、

どの〈丘〉も リュコリス⁽¹²⁾は美しい と告げている間に。

裕福で幸福な人！このように見張りをしながら眠れるとは、あらゆる心配事から解放されて、周りの田舎娘⁽¹³⁾や笛、羊はともかく。

しかし御覽、〈月〉が昇っている、眺めてみよう
扉の上の方を見張っているのを、誰か劣った

〈絵描き〉の手で描かれて、それで利益を得ようとして
彼女の顔を居酒屋業の〈到達目標〉にしたのだった。

この〈一杯〉⁽¹⁴⁾を彼女に、そちらのをエンデュミオンに与えよ

彼らに生命を与えたのはまず才智であり、葡萄酒だつた、
あの〈絵描き〉に窒息を！そして彼の〈絵具箱〉^(ボックス)が頭^(あたま)にするのは

彼の火のような〈鼻〉⁽¹⁵⁾以外の如何なる〈色合い〉でもなく
我らが目にするのもはや彼の絵筆のものではなくて
二人の〈教区委員〉と〈死〉⁽¹⁶⁾であつてくれるように。

もし我らが今彷徨い廻れば 出逢うのはどの街路でも
〈執達吏〉⁽¹⁷⁾に売春婦、そして〈二輪馬車〉の筈だ、
今やどの狭い小路、人目につかない隅や〈横穴〉⁽¹⁸⁾、

標示支柱や店の扉があらゆるならず者のためにめかし込んで
いる時、

放埒な罪深いフラシ⁽¹⁹⁾天と 告げ口の拍車⁽²⁰⁾
フリート街⁽²¹⁾やストランド街を歩く時、淫らな裝飾り
付きの〈絹〉の柔らかなざわめきが夜を昼に変える時、
そして音高い鞭と〈大型四輪馬車〉が道々ずつとがなり続
ける時、

あらゆる類いの欲望とむずむず騒ぐ血の各々が
〈塔波止場〉からシムベリンとラッドまで

〈連れ合い〉を探し求め、疲れた従僕⁽²⁴⁾がぐらぐらと
駕籠⁽²⁵⁾早たちの、松明の、及び馬車の車輪の間をよるめく時、

さあ、やつて来て、別の一杯⁽²⁶⁾をやるうよ、彼に乾杯⁽²⁷⁾
愛馬を〈元老院議員〉にした男に、どの縁⁽²⁸⁾も私のと
同じくらい大きく見えるように、〈家畜の群〉⁽²⁹⁾全ての中で
も雄々しい陽気な〈獣〉（とあなたは言うだろう）は最小

のものではなかつた。

さあ もう一つの容器⁽³⁰⁾を飾ろう、彼の値打らしく豊かに、
私はそれに乾杯しよう、彼に！ 火のようにはつと
〈元老院〉の面前に燃え立って、ルビコンを横断して⁽³³⁾
〈国家〉の柱石⁽³⁴⁾へと彼らの〈法律〉を楯に進攻し

鈍い胡麻塩鬚連中や毛皮カウンを逃走へと追い込み
ブルンデイシウム⁽³⁶⁾へと談合して嘘つき潜ませたのだつた、

これは勇敢なスラへ！⁽³⁸⁾ そう言ったっていいだろう？
我らは死者よりも生者に乾杯するのだと。

追従者や愚か者共はそれを利用する、笑おうではないか
我ら自らの正直な浮かれ騒ぎを、他人の榮譽を讃える
ために痛飲する連中は好むものだから、自分の黄金や
食器類を他所者に使ってもらおうとして送る人々を。

たらふく飲もう、この〈カップ〉が孕む⁽⁴⁰⁾ように、そして
葡萄酒が才智の〈精気〉になつて我ら皆を神々しくしてく
れるように、

〈サツク酒〉と浮かれ騒ぎで気が大きくなつた我らが
更に多くの魂と一層気高い火の持主として引退できるよう、
そしてこの絵に描かれた〈空〉と苦心⁽⁴¹⁾の作の

構成力⁽⁴²⁾のせいでもっと高尚な物へと飛んでゆけるように、
そうなるだろう 我らは皆、もし〈転た寝〉に襲われるな
らだが

なみなみ注がれた〈カップ〉が〈詩の〉夢を見た後で。

さあ、笑つて、搾った葡萄を飲もう
うとうとした〈日の星〉⁽⁴³⁾が瞬き⁽⁴⁴⁾するまで、

そして我らが歓楽のうちに 狂つた浮かれ騒ぎが

〈太陽〉より速く遠くまで 走り続けるまで、
そして誰にも 手にした〈カップ〉を捨てさせまい
あの〈星〉が再び目醒めるまで、
そうすれば 我ら下界にいる人間は動くこと⁽⁴⁵⁾だろう
上に在^{いま}す神々と均しく同じように。

[M・一〇—一二]

訳注

(1) 一六四六年版詩集では r. 記号だが、語源上の理由など
ではない。(sはeの誤植のように思われる[F・一六])
‘hapsoy’の意味は、今は廃れた「雑多なもの寄せ集
め」で、この詩の全体に及ぶ一貫性の無さに関わるかも知
れない[M・七〇—]

(2) 今は Southwark にあるものではなく Fleet St. にあった
それだろう (一六四七年の Hollar’s map に記載) [GM]
[M・同]

(3) For Tavernes need no Sunne, but for a Signe この行は、
フリート街「後出(21)」の「グロップ亭」からも遠くな
い「ホルボーン水路」(Holborn Conduit)の近くにあった
「太陽亭」(the Sun Tavern)を遠回しに指すかも知れない
[Ma・一二八]

(4) Sacke 一六一七世紀にスペインやカナリア諸島などか

ら英国に輸入された或る等級の白ワインを指す一般名称
(*OED*) [R・A・四四九]

(5) Illuminator 葡萄酒が壺を明るくし、詩人を輝かせる、
とらう二重の意で [M・a・同]

(6) That artificial Cloud...as one great Star 二つからの
の六行、『タレイアー』の「回復」〔続小考(二) 36-37〕
の冒頭の六行の心象と比較せよ。「我らが日々の光溢れる
美しい(器)、その誇り高く/先導する栄光があつた赤ら
んでいる(雲)を金色に飾る、/その活発な火が…翼を拡げ
た炎…去つてゆく」[M・a・二一九]

(7) one great Star おそらくその部屋の名前を表す描かれ
た星。この詩の二五—八行目参照 [M・七〇一]

(8) can't know pints from quarts 量の多少を見分けられな
い、の意を具体的に表示したもの、それが「詩」というも
のだ。共に、液「乾」量単位で、英国では、pint≠0.57ℓ,
quart=2pint≠1.136ℓ。

(9) loke where the jolly clowne...wench, pipe & sheep 二
つからの二つの六行、調子、雰囲気、そして一部は心象が、
キーツの「ギリシャ古壺に寄する賦」(John Keats, 1795-
1821, "Ode on a Grecian Urn") を思わせる [M・a・一三
〇]

(10) Downe = 一、hill (標題に在る) 二、高台の開けた広が
り。南及び南東イングランドの丘陵地帯は主に放牧に役立

っている [R・A・四五〇]

(11) frets = 一、disturbs, vexes 「苛立たせる」二、「駒をつ
ける」。駒付き (fretted) 弦楽器演奏の指使いに当て嵌る
ような語を垣間みせられる。シェイクスピアの次の一節に
みられるような地口 (pun) があるかも知れない。「ほく
をどうとでも楽器呼ばわりするのは勝手だがな、それでは
苛立たせる「駒をつける」ことは出来てもほくを掻き鳴ら
すことは出来ないぞ」(「ハムレット」三幕二場三八八—九
行) [M・a・二一九] [R・A・四五〇]

(12) Lyons ウェルギリウスの『アエネーイス』第六巻に出
てくる「本稿筆者には見当らなず」、一時期M・アントニ
ウスの、後にはウェルギリウスの友人で詩人ガルス、愛
人になったローマの女優の名 [M・a・同] / 同じく「牧
歌」第二二、四二が出所 [GM]

(13) wench 低い身分の生れの鄙びた娘、この語をこのよう
に使い始めたのは Gabriel Harvey と Spenser からのよ
うだ (*OED* wench Sb lb) [R・A・同]

(14) This Cup to her, that to Endymion give 月の女神 デイ
アーナとエンデュミオンに纏わる古典神話に言及 [M
a・一三〇]

(15) fiery Nose = red nose 「赤鼻」大酒呑みの兆候 [同]

(16) Then two Churchwardens, and Mortalite 絵描きを拒否
するのは、彼の描いた情景に共感を示した後では全く思

がけないものだ [GM]

三行目の 'Boxe' は、この絵描きの柵を地口ふうに指すか、この三四行目は彼の葬儀に言及するものだろう [M・七〇一]

通常二人の教区委員「教会の会計事務や死の記録など俗事に携わる信徒」——一人は教会管理司祭に、もう一人は教区民に、選ばれた者。E.P.Wilson, *The Plague in Shakespeare's London* (1927) pp.190-91. 参照。

'mortality' は今は廃れた意味で、個々人の死、を指す (OED2c)。教区委員と絵描きとの間には、おそらくこの文脈で相応しい秘められた関係がある [RA・四五〇]

(17) *Catchpoles* 特に債務不履行者を逮捕する下級役人。一六世紀以後、軽蔑語 [F・一七]

(18) *Now when...pimp for ev'ry knave* 周囲のもの悉くが悪徳の手助けをしていて、様々な種類の悪行で生活する人々に利益をもたらす、という意 [RA・四五二]

(19) *plush* 長く毛羽立った、ピロードより柔らかい布の一種。豊かな長衣、特に従僕のお仕着せに使われた。ここでは「低い階級の人々」を表す換喩語 [Ma・同]

(20) *tall-tale spurs* 「(内情を暴露してしまう) 上流社会の人々」を表す換喩語。語り手はこの境遇の人々特有の率直さを發揮して、召使い(フラシ天の人々)の下品な振舞いにこっそり迎合する思い上った人々を非難している [M

a・一三〇—三二]

'tall-tale' は馬車がちやがちや音を立てるところから「告げ口する」 [RA・同]

(21) *Fleet street* 大ロンドンの主要路で、テンブル・バー(西側の入口の門)からフリート川を越してラドゲイトへ到る。

(22) *the Strand* フリート街の続き、ロンドン中西部のテムズ川と平行して走る大通り、トラファルガー広場を起点として *the City* や *West End* とを結ぶ主要道路。

(23) *From the Tower-wharfe to Cymbelyne, and Lud* 市の東から西まで、ロンドン全体を表す。Tower-wharfe は、城壁で囲まれたロンドンの南東の隅にあった。ラッドとその孫シムベリンはブリテンの伝説上の王で、彼ら初期の王たちの彫像は西壁の中のラドゲイトに一二六〇年に設置された。ラドゲイトが一五八六年に建て直された時彫像も再建された [M・七〇一] [Ma・一三二] [F・一七]

(24) *footman* 初期の用法。乗馬の貴人に付き添って走る人。後に主人の駕籠の前を走る召使い (OED *footman* 3) [RA・同]

(25) *chaire-men* 椅子駕籠 (sedan chair) —— イングランドには一六三五年頃に入ってきた [Ma・同] —— を担ぐ二人 [RA・同]

(26) *dish = cup* [Ma・同]

- (27) it is to him/That made his horse a Senator 「彼」はカリグラ (Caligula, 12- [37] -41) 「狂った妄想のせいで暴虐・乱費の限りを尽して結局、妻と娘と共に暗殺された。スエートーニウス (Suetonius, c69-c140) の『皇帝伝』参照」 [M・七〇一]
- (28) Each brim/Looke big as mine どのカップも私のごとくじょうになみなみと注ごび [Ma・一三三]
- (29) Herd ローマの元老院を指す、勿論、カリグラの行為の暗示によって [同]
- (30) crown the second bowle それを一杯に満たせう [同]
- (31) his worth ユーリウス・カエサルの値打
- (32) it = his worth
- (33) crost ヴォーンが単語をしばしは二重の意味で使う好例。一、通常の意、ルビコン川を「横切る」、二、「法律を楯にした国家の柱石」に「反対する」 [Ma・一三三]
- (34) the States pillars ローマの元老院全般、特に当時の元老院を代表するポンペイウス [同]
- (35) the dull gray beards, & furr'd gowns ポンペイウスと彼にしたがう元老院議員たち [同]
- (36) Brundisium 南東イタリアの海港、現ブリンディシ。そこへポンペイウスと彼の元老院議員の友人たちが、カエサルがローマへ進攻してきた時、逃げた [F・一八]
- (37) he = he おそらく二重の意味、「嘘をつく」(敗北を合

理化しようとする)と「潜む、隠れる」 [Ma・同]

ヘンリー・ウォットン卿 (Sir Henry Wotton, 1568-1639, 英国の詩人・外交官) —— 「苦痛」 「続小考 (一) 30」の訳注 (4) も参照 —— の定義と同様の地口、「大使とは、自国の利益のために外国で嘘をつく「滞在する」ようにと派遣された正直な人物のこと」 "An Ambassador is an honest man sent to lie abroad for the good of his country" [R・A・四五二]

この一節(二ごまでの六行)、ローマの元老院に対するユーリウス・カエサルの有名な大胆な勝利へ言及 [Ma・同]

(38) Sylla = Lucius Cornelius Sulla (138-78 B.C.) [ローマの] 將軍、政治家、独裁官 (82-79 B.C.) 彼のローマ独裁支配が、ユーリウス・カエサルの独裁の模範となった [F・一八]

反共和制の急先鋒であるカエサルとスラを褒めそやして言及するのは、チャールズ一世に反対した議会派議員たちへの遠回しの攻撃である [Ma・一三四] / 当時の英国の政治状況への言及で、カエサルの行為を指した「元老院の面前に:」はチャールズ一世が五人の議員を逮捕したこと、「勇敢なスラ」はストラフフォード [1st Earl of Thomas Wentworth Stratford, 1563-1641. チャールズ一世の補佐役として反動政策を推進し、長期議会から弾劾処刑された

政治家」を思わせる「GM」「H・四三」この具体例にマリラは反対「別に反対しなくてもいいだろう——本稿筆者」、ラドラムは賛成する「RA・四五二」

(39) *doe like those that sent...to be spent* 内戦を予期した前以つての準備として、一六四二年六月九日に議会が発した布告（政策に共鳴する者は、金銭、金銀食器類、馬を供出するように、という）への言及、その法令に応えた者を「追従者や愚か者」は指す「Ma・同」

(40) *pregnant* 結果が実り多くなる「Ma・同」／才智が効果を挙げて「RA・同」

(41) *labour'd = highly elaborated*「高度に凝った」おそらくあの絵描きへの重ねての軽蔑が意図されていよう「RA・同」

(42) *influxe* 占星術の意味での「影響力」(OED *influx* 3)「RA・同」

(43) *Day-Starre* 太陽（詩語）

(44) *winke* 一、文字どおりには「眠りにつく」、四行下の「眼醒める」(*wake*)に先行する。二、「沈む」「Ma・同」

(45) *more/Equally with* 「と同じ程度に生きる」「と同等のものに基づいて」『燧石』の「陽気さ」「小考」(八) 18「の四―五行目」私は輝き、動いてゆく／頭上にあるもの同様「参照」[Ma・同]

「ある悲歌」に続いてもう一篇、この長篇詩が（アモレット詩篇）の間に入り込む。これは最初の作品の酒場の狂騒を思わせる作品で、詩集の冒頭との繋りに改めて読者の注意を引き、詩集全体を引き締め、膨らませて豊饒にしているのが感じられよう。外観は一見関係が薄そうにみえて基本はやはり「愛」の詩、憂国の士の愛国の詩、であることは一読十分に感取される。全て一〇音節詩行の二行連句七〇行と、字体の異なる最後の八行（音節数は順に87887778）から成る総計七八行の力作である。

アモレットへ、彼と他の〈恋する人たち〉との違い、及び真実の〈愛〉とは何かについて

*To Amoret, of the difference 'twixt him, and other
Lovers, and what true Love is*

注目しよう（夕べ）の冷たくなってきた翼が⁽¹⁾

苦痛に呻く空気を煽る時 弱つてきた（太陽）が

自ら始めたことを

終わらせないままにして

あのへどろや土から吸い上げられたまやかしの炎を⁽²⁾

その最初の低い誕生
へと戻し 委ねる有様に。

その炎は 安びかの光線と虚栄を打ち出す、

膺の火を挿頭かざして縫い進みながら、

しかし君は留まって

その炎が彷徨さまようのを眼にしている

その燃え進んでゆく跡を見失う、と 微妙に炎は

弱まって消えてゆき

君の〈眼〉を欺く。

丁度そのように(3)にさもしい〈月下の世界の恋人たち〉の心は

たるんだ冒瀆の欲望に養われて

〈眼〉とか顔(4)に

応じるのかも知れない、

しかしそういう欲望も除かれてしまうと、彼らは間もなく

別れて

自らの〈手管〉(5)と

虚飾の炎を(6)さらけ出すのだ。

そのうちに私は強力な〈愛〉によって甚だ洗練されて
私の不在の魂が同じ状態になり(7)
うっかりして一瞥も

口付けもし損なって

あの、煩惱と感覚の様々な〈要素〉が

なくとも不自由なく

心に求愛できるのだ。

こうして〈北方〉へ〈磁鉄鉱〉は動き(8)

こうしてそれに魅惑された鋼鉄は憧れる、

こうして、アモレット、

私は感動させるのだ、(9)

そしてこうして翼を上げた光の束とお互いの火によって

〈精霊〉(10)と〈星々〉が共謀する、

そしてこれが 〈愛〉(11)なのだ。(12)

[M・一二—一三]

訳注

(1) Marke, when the Evenings cooler wings 以下最初の二
連の心象は、空の夕焼けの色からのものだが、ヴォーンが

心に抱いてゐたのは 'ignis fatuus' [= frat's lantern, jack-o'-lantern, will-o'-the-wisp, 鬼火、きつね火/人を迷わすもの(希望、理想)、誤った目標)だったと思われる。この箇所、『燧石』の「混乱と脆さ」【小考(五) 9-11】第三連と訳注(1) 参照【M・七〇一】

(2) spurious flames この「まやかしの炎」をその出所である「<どろや土>」に太陽が返す、の意【RA・四五三】

(3) Just so...prophane desires この二行、鬼火がへどろや土から生ずるように、さもしい月下の世界の恋人たちはたるんだ冒瀆の欲望に根差す、の意【同】

この一五行目からの第三、第四連(二八行目まで)は、ダンの「告別の辞・悲嘆を禁じて」の第四連「本稿前掲『彼から去ってしまったアモレットへ』注(4)」と第五連「しかし我らは愛によって甚だ洗練されているので／それが何であるか自分では分らず／その心を互いに請け合つて／それだけに余り眼や、唇、手を気にかけて見損じてしまふ」、及び、ハビントンの「世界へ・愛の完璧」や「愛の調和」カールの「跳ね返ってきた軽蔑」, Disdain Re-turned, などの類似の詩句【Ma・一三八】に引例)に注意【M・七〇八】。当時、同じような考え方、観方が存在した。

(4) May for an Eye 二)からの五行(第三節末まで)、月下の世界「現世」の恋人たちの心は、何か気持のよい容貌

に惹かれると愛想よくなるが、それが取り除かれると心はすぐに離れて、それぞれの心が備えている欺瞞と偽善が顕になる、の意【M・七〇一—二】

(5) Art = insincerity 「不誠実」(OED art sb 13) 【RA・四五三】

(6) painted fires 五行目の「まやかしの炎」, spurious flames, 及び九行目の「贗の火」, 'false fires', との巧妙に工夫された対比【Ma・一三七】/ 'painted' = artificial, lacking in truth「見せかけの、真実に欠ける」(OED painted sb) 一七世紀の作家たちには恥辱や軽蔑の意でしばしば使われた【RA・同】

(7) my absent soule the same is 「君から」離れた私の魂は、君の居る処での魂と同じになる【Ma・同】/ 「私の魂は不在になつても変らない」【RA・同】

この第四連で、基本となつている哲学の観念が変遷し始める。ここでの主題は、真物の浪漫的な愛は宇宙に滲透している神授の相性の良さの現れだ、という新プラトーン派の観念であり(「彼から去ってしまったアモレットへ」アモレットへの歌)にも現れている)地上世界のあらゆるものの中にみられる相思相愛の結果を生み出すだけでなく、地上と至上の世界を結合する力として働く、というもの【Ma・同】

(8) Thus to the North the Loadstones...th enamour'd steel

aspires 磁鉄鉱の類推は一七世紀の文学では到る所で行われたが、ここでは単なる表面上の譬喩に留まらない。この心象が人気の高かったのは、磁力について発見されたばかりの原理が、広く流布していた新プラトン主義の理論の真実さを示すもののように思われたという事実、概ね抱えるだろう。ここでのこの観念は論理的な帰結。この「こうしつ」*Thus* は、重要な不可欠の要素だ、これによってこの主調——真物の浪漫的な愛と磁力のような牽引力とが根本的に一致するのだ——が明示されるのだから「*Ma · 一三八—一三九*」。*thus* は執拗に四回反復される。

loadstone (= *lodestone*) 「磁鉄鉱」黒く普通は八面体の結晶鉱石で磁力が強い。「磁力を持つ鉄の酸化物で磁石として使用される(水夫を導く磁石の使用から、文字通りに「*way-stone*」道石)「*load*」の語源は「道」]「*Tode-star*」道しるべの星、北極星)参照 (*OED*) [*RA · 同*]

- (9) *affect* = 1' to love 「愛する」(*OED*2) 2' to aim at 「得ようとする」(*OED*1) (*Ma · 一三九*)は = to lay hold upon 「おっこと掴む」[「北」が「磁鉄鉱」をのように]の関連する両義で「*RA · 同*」。拙訳、両義を含めて「感動させる」とした。

- (10) *Spirits = souls* [*Ma · 同*]

- (11) *conspire* 目的に叶った結合・調和をもたらすように行動する [*Ma · 同*]

可視、不可視両世界を結合する力、という概念(二二—二八行目)の一部には、人間の魂とは星々から神の精霊が発散したものの、という考えがある。「魂」と「星々」の間の牽引は、万物を秩序立った全体へと結合する一段と強い親和性の一部だ、という主張が、やはり最後の「こうしつ」*thus* で念を押される「*Ma · 同*」

- (12) *And this is LOVE* こうしつこの最後の二連の合意は、「愛」は磁力のような魅力と「魂と星々」の親和性に具現化される宇宙の結合力の発露だ、という主題に公然と収斂する「*Ma · 同*」

ここに挙げられている例は全て、接近してない引き付け合いである。人間の間での愛は、主要な宇宙の原理が人間の面に現れた、普遍的な現象の特例となる。

ラDRAMは、ここに、イタリアの新プラトン主義の哲学者フィチーノ (*Marsilio Ficino, 1433-99*) の哲学の要点、「世界は愛の原理で組織され動いているのであり、愛こそは世界の各部分各々の誘因でありそれらを統合するもの」を見ている「*RA · 四五三*」

同じく、女性を愛する人でも、自分は他のそういう人々とは違うのだと、その違いを訴え、真実の〈愛〉について前記の諸訳注に詳述のような新プラトン主義の哲学を垣

間見せながら語る七行詩五連から成る、〈アモレット詩篇〉
 の中では詩型も最も凝った作品である。異なる韻をABC
 で示して各連の押韻の型と音節数の按配を記せば次のよう
 になっている。

A10	A8	A10
B4	B4	B7
B4	B4	C4
B4	B4	C4
C10	B10	A10
C5	B4	A4
A4	A4	B4
A8	A4	
B10	C4	
C4	C4	
C4	B10	
B5	B5	
A4	A4	

泣きぬれるアモレットへ
 To Amoret Weeping⁽¹⁾

残つていてよ、アモレット、そんなに早く消え去らないで
 君の〈眼〉⁽²⁾という美しい宝物、〈運命〉の最も富んだ〈一
 振り〉⁽³⁾も

その一個の真珠の値打には敵わない、何故ならこれだけ十
 分に費やせば

〈星々〉⁽⁴⁾を購えるし、〈天国〉での我々の〈住まい〉も
 買えるのだから、尤もここでは あの敬虔な流れが
 我々に何の助けにもならないのだが、〈太陽光線〉のあの

〈糸玉⁽¹⁾〉から

誰がこれまで糸の一本も盗み出せたか？ あるいは親切な
 説得力のある〈抑揚〉で 荒々しく騒々しい風を魅惑でき
 たらうか？

〈運命〉は我々を皆 〈大理石〉の中に彫り込み⁽⁵⁾、あの
 〈書物〉は

我らの数分間を出し抜く、我らは予期することは出来る、
 しかしめつたに変化に應じられない、君は思ふかい 涙が
 燧石のような堅い〈本⁽⁶⁾〉に染みをつけられると？ 我らの
 恐怖あるいは悲嘆は 彼らの勝利を増すだろうか？そして
 我らは逆境を有利にしなければならぬのだろうか？

ああ君 怠惰な〈放蕩者〉！ 正しくないだろうか
 我らが自分の〈星々〉を担うのは？ たとえ私が虫に
 被せるに足る埃⁽⁷⁾を持っていなくてもかまわないのでは？
 あるいは一寸した泥や砂の奴隷にならなくても？
 私はずっと増しな買物を誇りに思い 示せるよ

唯 紛れもなく真物の魂の栄光を。

しかし私が生れた時 今より金持ちのどの〈惑星〉かが
 私を探り出して 甚だ多くの土か黄金を測って
 私の取り分に相応しいものにしてきてくれたとしても、

私はこういった低級な〈諸要素〉の奴隷になっていただろうし、私の気高く生まれた魂がそれらの滓で衰えて、卑しい泥と〈輝く灘〉^(アルケマイ)への囚人になっていたことだろう、

私はおそらく〈孤児たち〉を食らっただろうし、一ダースもの困窮している寡婦を〈コップ〉一杯で吸い込んだことだろう、

いやそれどころか、私はあの合法的な窃盗によって〈忌まわしい〉^(ゴメン、ワケルス)〈高利貸し〉⁽¹³⁾〈共和国〉⁽¹⁴⁾を無効にしたことだろう、

あるいはその〈専売権を得〉⁽¹⁵⁾たことだろう、〈石鹼〉とか〈石炭〉で、それで

〈鍛冶屋〉一家に私を呪わせるし、私の〈洗濯屋〉⁽¹⁶⁾にも。葡萄酒とか その友人である〈煙草〉を薄めたりして

激怒した臣民に 自分たちの〈王〉に〈叛逆〉させる、そしてその挙句 (あの最初の罪人たちが墮落したように) 私の黄金より低く沈ませて〈地獄〉に横たわらせるのだ。

だからこういう解放に感謝だ！ 崇むべき権力者人間の運とその時間を分け与える君たち⁽²⁰⁾、

私がどれ程 君たちを本当に有難く思っていることか！⁽²¹⁾ こうしてあれ程奇妙な殆ど奇蹟のような手段によって

私を保護してくれるのだから、どこまでも

私を裕福にしてくれたのだ、全てを取り去ることで⁽²²⁾。

なぜなら私は (もし裕福だったなら) 運命同様確実に干渉し続けたことだろう、〈王様〉にもしくは〈国家〉にあるいは何かしら自分を破滅させることに、成程その通り (周知のこと) 富める者には才智がないというのは。

しかし なかんずく、あの摂理のお陰で、何しろ素晴らしい魂と分別で 私を武装して下さってあらゆる不幸を押しつけ、〈天国〉をたっぷりと私の中に吹き込んで下さるので 私はあのような

低級な物事には触るのも軽蔑し、勇気をもって いやしくも運命があるいは悪意が用意するものを物とも

しないでいられる、
しらないでいられる、

そのお陰で、私は人間の財布や鋳山⁽²⁴⁾を羨まないですむのだ 私には分っている

そういうものを失くして私は彼らの呪いも失くしたと、だからアモレット、(私たちがこういう物の分け前に与っ

ていても

軽蔑されることはなく 大いに喜ばしいわけでもないが) やはり〈満足〉と〈愛〉とを二人が一緒になって張り合っ

せているうちに⁽²⁶⁾

私たちは黄金ではとても買えない至福に恵まれるのだよ。

[M・一三—一四]

訳注

- (1) 次の作品の標題 (Habington, To Castara, Weeping) 参照 [RA・四五四]
- (2) Leave = stop (OED leave v¹ 10) [同]
- (3) Cast 賭博での大当り。さいころ遊びからの譬喩 [同]
- (4) purchase Stares 正義の人の魂は地上で生きた後は星々に住む、という信仰への言及 [同]
救済の手段としての涙ながらの悔い改め、という観念は、ルネッサンスの顕著な信仰の一つだとして、マリラは『燧石』の中の「呼び掛け」「私が誰を悼むのか知る方は」「決意」「協約」「規則と教訓」「棕櫚の樹」「森」「順に、小考(十二、九、八、十二、五、十一、二)に全て拙訳済み] やダン、ハビントンの例など挙げる [Ma・一四〇]
- (5) Fate cuts us all in Marble 運命の命令は持続するもの、大理石は永続性の典型と考えられた (OED marble sb 1d) 及びシェイクスピアの「諸王子の大理石の墓石も金びかの記念碑もこの強力な韻より長生きてできない」と始まるネット五五番参照 [RA・同]

- (6) Forestalls our glasse of minutes 我々がどの位生きられるかを前以って知る、glass = hourglass 「砂時計」[同]
- (7) their = of Fate and the Booke (九行目) [M・七〇—七二]
- (8) beare our Stars 運命に堪える [RA・同]
- (9) dust ヴォーンが指すのは、土地か金銭 (OED dust sb ⑥) か、とにかく一般的な意味とは少し違う [RA・同]
- (10) purchase = possession 「所有物」[Ma・一四—一六]
ヴォーンは、相続ではなく個人の活動によって獲得したものと違う法律上の概念 (OED purchase sb 5) を指して言う [RA・同]
- (11) Alchymie = glittering dross 「輝く澱」(「光るもの必ずしも金ならず」) (OED alchymy 4) と、ハリントン [Sir John Harrington, 1561-1612. 英国の政治思想家、エリザベス一世に仕えた] の「その見かけは輝かしいがその実質は澱であり、alchemy とペテンに他ならない」(OED に引用) 参照 [RA・同]
- (12) eate Orphans.. in one Cup ランドルフの「彼が詩神に享受する測り知れない満足について」(Randolph, "On the Inestimable Content he Enjoyes in the Muses") の「寡婦の呪いが私の一皿を提供してくれない／私はワインで／孤児たち／の涙を飲んだりしない」を参照 [M・七〇—七二] 及び「ヤコブの手紙」I・27「みなしこや未亡人が困っている時に訪れてやり、世の汚れから自らを守ること、これが神

と父の前での汚れない清らかな宗教です」も「RA・同」

一七世紀の作家の間では、孤児や寡婦を食いものにするという概念は極端な無情の象徴として持て囃された「M

a・一四三」

- (13) *Damn'd Usurie* 高利貸業は一七世紀の作家一般の悪罵を浴びたが、ヴォーンはこの事業への蔑視は人後に落ちない。「金貸しの友人に」*"In Amicum Jeneratorem"* M・四三—四四はその典型であり、「彼の友人へ」*"To his friend"* M・四四—四五や「彼の引退した友人へ」、ブレックノックへの招待「小考」(一) 15 16 の八一—一二行目にもその例がある「Ma・同」

- (14) *Common-wealth* コモンウェルスは「国家」と字義どおりの「公共の富裕」の両義で「Ma・同」

- (15) *Or Patent in Soap, and Coales* ヴォーンは、一六三〇年代に政府が同業組合に独占権を与えたことで生じた政治疑獄に言及している。王国内で生産される物質から新しい過程によって石鹼を製造する専売特許を、何人かの個人が議会から得た一六三一年に始まる。すぐ翌一六三二年に国王が介入して、石鹼製造会社を設立してそれに専売特許を与え、見返りに手数料を国王が受け取るというもの。おまけにその会社は、個人の製造業者の石鹼を検査する権利を与えられ、その販売もこの会社の許可なしでは不可にし

た。そのためこの会社と個々の製造業者との紛争となり、遂には一六三五年の有名な「石鹼騒動」になる。一六三〇年代後半は、人民の政府に対する悪感情が高まった。国内産業促進の目的だったのだが。

同様の事態が、ほぼ同じ頃、国王に或る特権を与えられていた石炭船所有者の同業組合にも持ち上っていた。石炭の値段を規制の価格以上に吊り上げようと石炭不足を工作したため、政府の専売特許に対する既に激しかった人民の怒りを増幅した。次行の鍛冶屋、洗濯屋は、各々石炭と石鹼が関連する職業「Ma・一四三—四四」

- (16) *Geld* 「混ぜ物をする(こと)で」弱める、薄める」(*OED* *geld* v. 2) 「M・七〇二」／税を安くする「F・二二」

- (17) *First sinners* 天国から地獄へ落とされた反抗する天使たち(例、「ペトロの手紙」二、2・4 「神は罪を犯した天使たちを容赦せず…」)「Ma・一四四」

- (18) *Sinke lower then my gold; and lye in Hell* 黄金は地球の中心で生ずる、という伝統的な観念、及び地獄は富の究極の源だという同様に紋切り型の考えを用いている。

二—三六行(第三節)は、最悪の罪の源は限らない富への渴望だ、というユウエナーリス(*Satine XIV*)の主張への馴染みぶりを反映している「Ma・一四五」

- (19) *his hours* 人間の一生の長さ「同」
- (20) *blessed pow'rs, / You = the stars* 「星々」「Ma・一四六」

(21) engage'd = obligated [M a · 同] / = obliged, attached by gratitude [R A · 四五五]

(22) To make me rich by taking all away トラハーン [Thomas Traherne, 1637?-74.] の『至福の詩集』所収の「名士」(“The Person” in *Poems of Felicity*) の「装飾も聖服も王冠も光線も加えたりはせず／全てを取り去ることで榮譽を与える」と比較せよ [M · 七〇二] / 同じ「裕福な」rich'じゅふ'この行のは「全てを取り去られた」裕福で、次行のは通常のそれであつて、意味が異なる。

(23) sence = intelligence [M a · 同]

(24) mans purse, or mines 人間世界の金銭や財力、富源を表す換喩。

(25) these = worldly possessions 世俗の所有物 [R A · 同]

(26) joyntly vye = match one with another [F · 二二] / = display in mutual competition 「互々の競争状態を露呈する」(OED vie v.4. 一七世紀には極めてありふれた意味) [同]

時の政情を豊麗な心象で具体的且つ的確に皮肉に活写しながら、そういう騒然たる状況の中でも、世俗の物を取り去ることで精神を豊かにしてくれるという摂理のお陰で、「私」は悠然とアモレットに愛情を表明できるし、彼女にもそれを受け入れてくれるようにと説き希う。

アモレット詩篇六篇のうち最長の五八行から成る全て一〇音節詩行の二行連句である。

ヴォーンの最初の詩集に収録された十三篇の自作詩の最後は次の作品になる。

プライオリー森について、彼のいつもの引退

UPON THE PRIORIE GROVE, His usual Retirement

万歳 神聖な陰！ 涼しい 葉の繁った〈家〉！
私のあらゆる誓いと 富の
清廉な〈金庫番〉！ その柔らかな胸に置かれていたのだ
私が初めて己をさげ出した我が恋人の美しい足取りが。
ここからは憂鬱な飛翔や
悲しい翼、あるいは嗄れ声の〈夜〉の鳥が この
〈大気〉を掻き乱すことはないし、〈ワタリガラス〉や
〈梟〉の 死をもたらす鳴き声が 私たちの宥められた
〈木霊〉の〈調べ〉を目醒めさせることもなく、声と
いえばピロメルしかこの木々の葉の中には棲んでいない。
ここでは有毒な〈木蕨〉も もはや
〈樫の木〉に こまかしの歪みを刻みつけることはなく、

ここでは〈ニオイニンドウ〉⁽¹⁰⁾だけが巻きつくだろう

彼女の〈愛〉と私のとの〈表象〉⁽¹¹⁾として、

〈情の篤い太陽〉は、ここでは己の最良の

光線を、汝の陰へ送って働かせる、

活発な大気、この上なく穏やかな驟雨は

彼の翼から汝の花々に雨を降らせるし

〈月〉は己の露で湿った髪から⁽¹³⁾

最も輝かしい滴りで汝を飾り立てる、

何が空想を動かそうとも

眼を養おうとも、この〈森〉に〈居る〉ことだ、

そうすれば遂には〈風〉と、〈天国〉の

〈涙〉とが、年月が消耗してゆくのにつれて

こういう緑の渦巻を衰えさせていって

汝を年老いた〈灰色〉に覆い包む時には

〈もし責任を〈恋人〉であれば予知できるものなら

あるいは我ら〈詩人〉が〈預言者〉である筈なら⁽¹⁵⁾

今後は移植されて汝はなる筈だ

〈至福の楽土〉⁽¹⁶⁾にある新鮮な〈森〉⁽¹⁷⁾に、

そこでは(この上なく祝福された一対!)〈大地〉のここ

でと同様に

汝は最初に私たちの成長と誕生⁽¹⁸⁾を目撃したので

再び汝はそこに見ることだろう 私たちが

最初の〈無垢〉なままで動き回って〈愛する〉のを、

そして汝の陰の中で、今同様、その時も

私たちは口付けし、微笑んで、歩き回ることだろう再び。⁽¹⁹⁾

〔M・一五—一六〕

訳注

- (1) ヴォーンの最初の妻になるキャサリン・ワイズ (Catherine Wise) の家族のおそらく友人であるハーバート・プライス大佐 (Colonel Herbert Price) の家郷 Brecon Priory の森林地 [H・五二—五三]。この詩は明らかにヴォーンとキャサリン二人の最初の出逢いと求愛を自ら祝賀したものの [M・七〇—七二] [F・一一二]

(2) wealth 結婚の幸せを指す譬喩 [Ma・一四八]

(3) Treasurer 森が終始擬人化されて「汝」と呼ばれる「誓い」の「管理人」だと捉えられる [Ma・同]

(4) on whose... My loves faire steps I first betrayd 森の芝生の「柔らかな胸」に坐っていた時、未来の妻の「美しい足取り」がそと近づいてきた。「我が恋人の美しい足取り」とは「彼女への私の愛の進展ぶり」でそれを初めて「おぼろげ出した」=「知られてしまった betrayd」(OED)

betray 6) [M・七〇二]

- (5) melancholy flight 鳴き声が死の前兆という不吉な連想のある鳥 'Raven', 'Owl' の前以っての言及 [Ma・一四八]
- (6) ヴォーンはランドルフの「サヨナキドリの死について」
"On the Death of a Nighthale" 中の詩句「不吉な梟ともや死をもたらすワタリガラスの鳴き声の／金切り声の調べ」を思い出していただろう [Ma・一四九]
- (7) laid = silenced 「鎮められた」 (OED lay v¹ 3) [RA・四五五]
- (8) *Philomel* = nightingale 「ナイチンゲール、サヨナキドリ」 [同]
- (9) false = deceptive (OED false 12) [RA・四五六]
- (10) Woodbine 数種によじ登り性の低木の総称、スイカズラ属。花言葉「愛情移りやすし」(inconstancy)、「愛の絆」(bond of love)／おさへへ 'honeysuckle' 「スイカズラ」 [RA・同]
- (11) th' Embleme of her Love, and mine 「スイカズラ／恋するニオイニンドウの子」 (OED honeysuckle 2b, 1640. に引用) 参照 [同]
- (12) The Amorous Summe 熱烈な恋の人、太陽神アポローンの神話に言及。この一節では太陽と月が、「彼女の〈愛〉と私のとの〈表象〉」だと考えられているか [同]
- (13) her dewie lockes 古代人は、南方の風土にあって月が皓皓と照る夜に露が最もしとどに降りるのを観て、それは豊饒の源を与えるディアーナ「月の女神」のせいだとした。彼女は夜な夜な、丘陵や森を泉の妖精を引き連れて彷徨うと言われた [Ma・一五〇]
- (14) consuming years 世界は終末に近づいてゆく衰退の過程にある、という当時の理論の反映 [Ma・同]
- (15) if we Poets, Prophets be 詩人は預言者だという概念は少くともプラトーン（詩は神の息と考えた）に溯る。ハピントンに「もし我ら詩人が／真物の預言者なら」なる詩句 ("To the Honourable... R.B. Esquire") がある [同]
- (16) Elysian Land エーリュシオン (Elysium) 「ギリシャ神話。英雄・善人が死後に住む楽土」のような理想・桃源郷・至福の地。
- (17) A fresh Grove.. walke agen じつから詩の最終行まで、ランドルフの先刻の詩「訳注(6)」の九一―四行目「あの魂はエーリュシオンへと飛び去った／汝は取り残された哀れな砂漠、だから行って／そこに森が成り立つよう乞い願おう、もしも彼女がいそいそと／再び汝の陰多き木々の下で歌うなら／祝福の冠を受けた幸せな恋人たちの魂は／汝の周りに集って口付けを浴びせらるだろう」と較べよ [M・七〇二]
- (18) our growth, and birth じつ「私たちの愛情の」。

「GM」は示唆する、ヴォーンは次の詩を知っていたと。カートライトの「私に若いと思われたかったクロエへ」(William Cartwright [1611-43] "To Chloë who wish'd her self young enough for me" [Poems, 1651, p.244]) の「誕生に二つある、一つは光が／眼醒めたばかりの感覚を初めて打つ時／もう一つは二つの魂が一体となる時／私たちはその時から人生を数え始める／あなたが私を愛した時、私はあなたを愛した／それで私たちは二人共新たに生れ直した」。

ヴォーンの「成長」"growth"という暗喩は、カートライトの次の二行「愛はそれから我らに新しい魂を与え／その魂の中に新しい力を植えつけた」と関連があるう「M・七〇一—三」

(19) agen [= again] の綴りは南部の発音を反映している。「新たに」"anew"と「更に」"besides"の両義だろう「Ma・一一九」

最初の申し込みを拒否されるが、その後アモレットの態度の一連の変化を経て遂に結婚に到り、その求愛の平安な回顧と思ひ出に行きつく。この一連の流れが、まず、男性間の友情から男女の性愛に移り、特定の女性との愛の経過が語られてゆき、最後は森でのアモレット（に相違ない女

性）との愛情が描かれることになるのだから、最後の森の詩も、〈アモレット詩篇〉の一篇であり、その終章ということになるう。この、九音節の二行以外は全て八音節詩行の、二行連句総計三六行の作品は、「森」の眼で描かれた「私」とアモレットの愛情の姿なのである。「ある悲歌」と「狂想詩」で豊饒に醸された〈愛の詩集〉で、ヴォーンは出発したのである。

当代の自国の憂うべき典型的な事情を、冷徹な凝視と生彩溢れる独自の描出で浮上させながら、諧謔と諷刺のうちに展開した、〈愛〉の詩集であった。本稿は、ヴォーンの最初の詩集に収録された、〈アモレット詩篇〉を含む十三篇全てを扱った。

因に、言うまでもないがアモレットは、スペンサーの『妖精の女王』(Edmund Spenser [1552-99], *The Faerie Queene*, 1590-96) に登場する、純愛を寓意する女性の名。男装の麗人騎士によって長い間の幽閉から解放され、恋人と固く抱き合う、という愛し合う者どうしが抱擁で一体となる姿で、作者の貞節の徳 (Chastity) を体現していた。

この詩集冒頭の作品の友人 R・W は、内乱の争いの渦中

で戦死した R・W と多分同一人物だと思われるが、その友人を悼む作品を最後に、並べておきたい。五年後に出版された詩集『アスクの白鳥』*Olar Iscaanus* (1651) に収録された。この作品はヴォーン最初の詩集と二番目の詩集を繋ぐ役割を努めていると同時に、〈アモレット詩篇〉の行く末を暗示する詩でもあるのだから。「彼」とアモレットに象徴されるヴォーンと彼の最初の妻との結婚生活は、十年ほどしか続かなかった。彼女は幼児を四人残して早世したからである。

一六四五年、チェスター近くのラウトン・ヒースでの最近の不幸な紛争¹で殺された R・W 氏の死を悼む哀歌

An Elegie on the death of Mr. R. W. slain in the late
unfortunate differences at Routon Heath, near Chester,
1645.

私は〈確認し〉た³、それでそれだけ翼が 私の激しい思いに与えられて、思いのたけが敢えて天国を攻撃する⁴のだ。
丸々一年の悲痛⁵に私はもがいて 今も
私の砂のような希望の不確かな良い結果にすがって

屈したくなかったのだ 依然として君に阻んだあの
あらゆる恐れに⁶、そして涙を抑えたのだった。

しかし君は逝ってしまった！ そしてその時ならぬ喪失は
そのようにして或る日 他の全ての日々を〈不機嫌に〉し
てしまった。

見たことがあるだろうか、どこかの〈川〉の花咲く崖縁に
立派な形の〈楡〉とか堂々たる姿の〈ビヤクシン〉が生え
ているのを

それらの〈渦巻き状の〉先端は〈朝の光線〉で飾られて
〈太陽〉を差し招き、昼間に囁きかけていた、

とその時 思いがけなく 猛り立った〈北方〉から
避け難く陰鬱な竜巻が迸り出て

騒々しい突風と共に地面から引き裂くのだ

〈陰った一対〉を、それでそれはどっと振り撒くのだ

その嘆き悲しんでいる葉という葉を、その間 力で圧倒
されたその震え続ける頭は 項垂れて長々と平伏する、

そのようにして彼は無理やり倒されたのだ、〈それ程に早
すぎる死〉が

彼の優れた心臓と活発な息の根を止めたのだった。

世間はまだ彼を殆ど知らなかった、彼の若い頃の〈魂〉は

ただその最盛期を新たに絶つたのだ、見せ場をむしろ盗み取つたのだ 与えるよりも、あたかも狡猾にも彼女は我らの蓄えを知りながら彼の宝庫を隠そうとしたみたいだ。彼の年月は（たとえ時間が自らの〈翼〉とガラスを⁽¹¹⁾

彼の負担にするにしろ）合計してなつたりは（ああ！）しないだろう 完全な負債になどは、（尤も）これ程短い期間で、彼の円熟した思想はあの役立たずの生活者たちより人間についてもっと多くのことを獲得してきたが、あの連中は⁽¹²⁾それでも敏速に己自身の〈勘定〉を全く上回つてしまつたのだつた。

彼は完璧なものを把握していたし、⁽¹³⁾鈍い

苔むした灰色でないしっかりした頭骨の持ち主だつた、

知識も〈ねじれた〉ものではなく、友人の名前を

〈目的〉や政策のために⁽¹⁵⁾に使い尽したりせず取つておいたがあの舞台で忘れられていった〈若者たち〉のようだつた彼らは〈芝居〉の短い時代だけ榮えて

引退していったのだつた、各々の役で〈宝石〉のように⁽¹⁶⁾彼は友人たちを使い尽したが主に自分の心の中であつた。

これだけではなかつたのだ 彼が秀でていたのは、彼の同等の勇氣がこれ程多くのことをこれ程見事に果せた

ことだつたのだ。⁽¹⁸⁾

彼は自らの〈神〉への恐れし知らなかつたが、敢えて如何なる不正行為も（ある者が行つたようには）しなかつたし、とにかく財布に入れなかつた 他人の汗と涙を、⁽¹⁹⁾それでいて王公の気高い行為の点では 彼の途方もない詐称者どもより進んでいたものだつたが、連中は最近彼らの〈王〉と〈国家〉の滅亡で思い上つたのだ。

彼は〈自己目的〉と〈公共の〉利益を織り込んで一体化したり、人民の血で⁽²²⁾ 自らの静脈を

満たしたりはしなかつた、〈全く〉どのようにしてだか

〈良心〉と〈名誉〉が彼を支配したのだ。おお 彼の日⁽²³⁾

〈火〉と〈雲〉に包まれた〈族長たち〉のように私は君の顔が懐かしくてたまらなかつた！私はどの〈群衆〉の中にも見たかも知れなかつた 君の持つような〈武器〉と兵士が

進軍する様を⁽²⁴⁾、だが雷光の真近を動く者はおらず、だから倒れる者はいなかつた。⁽²⁵⁾

気付いたことがあるだろうか 敏捷な〈眼〉は何と素早くその〈対象〉を〈奇想〉⁽²⁶⁾で捉えて、〈成果〉を〈魂〉と

対抗させるかに、だから断言することになるのだろうか

〈行為〉と見解とは共にそこに宿つているのだと、まさに

そのように彼は動いたのだ、撃たれたみたいだ彼の活発な手が血を引き出した、敵にも何が何だか分からないうちに。だがここで私は彼を喪くした。君のなげなしの砂の⁽²⁷⁾

最後の回転が君の大急ぎの墓を要求したのか、

それとも何か激しく目まぐるしい運命が（眼）からは隠

されていたが）

君を（捕虜）としてどこか遠い空へと放り投げたのか⁽²⁹⁾

私には分らない、だが 私は信ずるのだ

君の（勇氣）は卑しい（一時逃れ）を蔑むものだったと。

それが何であつたにしろ、あの日君の呼吸が⁽³²⁾

被つたのは（民間人）としてのか（通常の）死か⁽³³⁾

そうだったのだと私は強く思っている、だから私は⁽³⁴⁾

大変有名なお墓の榮譽に敬意を払い損なつてしまった、

それにしても君の愛しい亡骸に私は逢えず、私の（眼）は

君の（葬儀）も知らないでしまったし

最後の別れの際には、君には見えないように引き離されて

その（冷たい）敷布に悲しい喜びを確かと注げなかつた、

それでも どれ程敬虔な手が（私の手の代りに）

この務めを君のあの塵に果して⁽³⁵⁾くれ

遂には君が その静かな頭に（安っぽい）枕を、とは即ち

私有地の芝生を、借してくれた低い寝台から再び起きるに到つても、⁽³⁷⁾ 君の名前と思ひ出を貯えておくのに、あの（君主然たる）

愚か者の全てよりは、何しろ彼らときたら己が骨を

（先細の）真鍮や石の物言わぬ山に閉じ込めるのだから。⁽³⁸⁾

君は自らの名声で豊かなのだから 必要ないのだ

こういう（大理石脆弱物）や死後の名譽の⁽³⁹⁾

金ぴかの染みは。君の墓の上に眠っている砂でも

あの手と鉄筆を上回れないものは一粒もない、

だからどうしても我らは 認めざるを得ない、

彼らの山盛りは 君の塵より劣つているのだと。

だから（幸いなる魂よ！）この私の悲しみは何ものをも⁽⁴²⁾

君の完全なものには付け足せないが、それでもそれは

人間が（嫉妬）と万人共通の運命とを免れないように⁽⁴³⁾

君をもっと明るい日へと救い出せるかも知れない。⁽⁴⁴⁾

一日が終つて盲目となつた（日時計）に 夜中に我々に、

（太陽）が出ていた、と告げられるものがあるように

これらはおそらく、君の名声からすれば遠く及ばなくとも

君の名前を何かしらうつつすらと覚えていて もっと良い時

代に信じられるようにと（委ねる）ことが出来るだろう

君の忠節で誠実な人生と 勇敢な(終り)とを。

君の名前と武器が その場所を護⁽⁴⁷⁾っている、

君 我が友よ、私には見分けられなかった、——

[M・四九—五一]

訳注

(1) 一六四五年九月二四日にチェスター「イングランドの Cheshire 州の州都。英国では唯一、ローマ時代の城壁が完全な形で残っている」の砦から南東二マイル程のラウトン・ヒースで行われた戦い。王党派は最初好調だったが結局大敗した。町の城壁の「フェニクス(不死鳥)塔」から戦況を見詰めていたチャールズ王は退いて十一月一日までにはオックスフォードに戻った「H・六五」

(2) 何人もの研究者によつて種々考証されているが(その詳細は「Ma・一〇五—七、二〇—二」)前掲詩「我が氣高い友人 R・W」の R・W とほぼ同一人物だろうとは思われるものの確証はないし、R・W の「候補者は数人挙げているが」特定もされていない「RA・四八三」

(3) I am Confrim'd 拙訳六行目の R・W 氏の死の恐れを [Ma・1101]

(4) strike at heav'n 天国の不正を責める「私」の奇立ち

を示す「同」

(5) A full years griefe この戦いで王党派は総崩れになったので死者や行方不明者の名が確認し難かった。ヴォーンは戦いの後一年間友人の無事を望み続けたようだ「RA・四八三」

(6) to all those fears/I still oppos'd thee 君は生き残つたのだと自らに言い聞かせることで「私」はあれこれの「恐れ」を常に克服してきた「Ma・同」

(7) the unimely losse...Crosse 即ち、君の早世は、あの「王党派の敗北の」悲劇の日のように、以後の私の全ての日々を悶々としたものにした「RA・同」

(8) Have you seen...a prostrate length このここから一八行目までの自然描写については、ウエルギリウスの『アエネイス』(Aeneid, ix, 679-82)「パドウス河」「ポー河の古名」の岸とか楽し気なアテシス河のそばの、流れる水の空中高く、二本の榭が亭亭とそそり立ち、剪定されざる梢梢を天にもたげて、各々気高い冠を領かせているようで」と、同じく(ii, 626-31)「峰々で樵が、一本古木のトネリコを打ち倒さんものと熱意を込めて、幾たびも鉄斧を打ち振つて切り込んだので、それは今にも倒れんばかりとなり、枝葉震わせ冠をゆらゆらさせて遂には手傷に堪えかねて最後の呻きの轟音あげて、尾根から挽き取られて砕け落ちるようだった」(以上 Loeb 版の拙訳、泉井久之助訳「筑摩

書房、世界古典文学全集第二二巻」を参照した)をヴォー
ンは間違ひなく融合したものでらう【RA・四八三】

マリラは、カタルス (Gaius Valerius Catullus [84-54? B.C.] *The Poems*, LXIV, 105-11, F.W.Cornish 訳) を源泉と
して挙げる。「タウロス山の頂上で大枝を揺っている木が、
榎の木だか、松毬をつけて樹皮に汗を滲ませている松の木
だか、激しい嵐が吹きまくる突風でその小さな種子をね
じって引き裂く時には、遠く離れた根のそばで身を振りな
がら俯せに倒れてその際におつかる全てを壊してしまふ—
—そのようにテーセウスはその怪物の巨体を打ち負かして
平伏させるので、怪物は虚しく角を、うつろな風に向かっ
てもたげるのだ」【Ma・二〇二】

(9) *The Shady twins* 一〇行目の「楡」*Elme* と「ビヤクシ
ン」*Cedar*。あそびでは「とか」「or」とあるので矛盾する
が【RA・四八三】

(10) *she = his soul* 別の箇所ではヴォーンは男性形を使う。
例えば「或る幼児の埋葬」【小考(六) 36】では「魂」を
his で受けている。この作者はこの件では一貫していな
い【RA・四八三、五七〇】

(11) *his Wings and glasse* 擬人化された(時間)はしばしば
翼が生えており「速さを象徴する」砂時計 (*glasse = the
hour-glass*) を持っている「人間の生命を測ることを象徴
する」ものとして描かれた【RA・四八四】

この行から三三行目まで、次を参照。Habington, *Castara*,
"An Elegy upon the Honourable Henry Cambell..." 7l. 1-10.

「君の呼吸は間もなく尽きるといふ／その間違つた勘定
とか不敬な死が／君の神性な若さを冒瀆したのだ、という
のも、もしも君の年月が／君の美德とか我らの涙によつて
数えられるなら／君はあの老メトシエラ「九六九年生きた
ノアの洪水以前のユダヤの族長」より長生きしたのだ／尤
も(時間)だが、二十年は君の地上での滞在について／説
明してくれるが、君の勇敢な若さの／一時間一時間は、美
徳の不思議な力によつて／一年に延ばされた。十分快適に
過した一日一日は／肉体を若く保つが、魂は灰色にな
る。」【M・七〇七】

(12) *all those worthless..Arithmetick* 「実年令よりも老け
む」の意。F. Beaumont(?), "An Elegie on the Death of the
Lady Rutland" の中の「自らの勘定よりもすつかり長生き
してしまつて／生き生きとしているあの年取つた婦人たち
皆…」と比較のこと【GM】【M・七〇七】

(13) *seizd perfections* 「深淵と知性を発展させた」【Ma・
二〇三】

(14) *a solid skull* 「健全な知性」【RA・四八四】

(15) *Ends and policie = selfish aims and expediency* 「利己目
的や便宜」【Ma・二〇四】

(16) *like Jewels...He wore his friends...at his heart* シェイ

クスピアの『ハムレット』三幕二場七七—八行「ほくはそ
の人を、ほくの心の奥に、いや心の真中で使い尽そう
(wear)」参照【M・七〇七】

Randolph, "An Elegie on the death of... Sir Rowland Col-
ton..." の「偉大なヘンリーは彼の処世訓を聞く／＼彼を
耳飾りの宝石として使い尽した (wore)」と較べよ【M
a・同】

(17) Nor was it... could as much, as well 二行、Randolph
の『詩集』に付した Feltham の推賞詩の次の二行参照。
「彼ほど秀でた、これ程すみやかに、これ程多くのことを
これ程見事に成しとげられた人を知らない」【Ma・同】

(18) His equal valour could as much, as well 友人たちより
勝れた士気を示したのだから、彼らと同等の勇氣であると
いうことは彼の卓越ぶりの証明になる、という意。

(19) nor... purst/The sweat... others 彼は他人の労苦や
悲しみから自分の利益は求めなかった、の意【Ma・同】

(20) royal gallantie 「王党派の信条に基づく勇敢な行為」
で、王公に相応しい勇敢さを指すだろうが、軍事には必ず
しも関わらなかつた。この 'gallantry' の意味は「勇敢
な行為」【卓越】「忠誠心」(OED) 【RA・同】

(21) pretenders... 王位を狙う者たち、即ち、王に反対した
議会派議員に関連したもので、一六四六年六月二四日のオ
ックスフォード占領も含めた軍事上の勝利も含む【Ma・

同】／その他、大義が明らかに失われた時に信条を捨て、
そうすることで利を得た「王党派」も指しそつだ。ヴォー
ンは当然ながらそういう人々を偽善者だと考えただろう
【RA・同】

(22) nor with the peoples blood... his own veins 当時の商売
の利権によって一般大衆が広く搾取されたことに言及、
「泣きぬれるアモレットへ」【前掲】三一行目の訳注(15)
参照【Ma・同】

(23) O that day... I mist thy face キリストの変容の場面への
言及、「マタイによる福音書」17・1—8【Ma・同】
もっと適切なのは、神がイスラエル人たちから身を、雲
と火の中に隠した場面、例えば「出エジプト記」24・15—
17。この直喩で R・W の顔は神のそれに譬えられるので
(勿論この直喩の要点ではないが) これは奇妙に軽薄な言
及にみえる【RA・四八四—八五】

(24) ... nor so fell on 二ことそれに続く数行は、ヴォーンが
この戦闘に積極的に参加したか、その近くに居たことを示
すもの【F・六九】／兵士としてではなく医師としてでは
なかったか【GM】／Beeston 城の守備隊員だったか
【H・六二】【M・七〇八】。【Ma・二〇五】に詳説。

(25) Have you observ'd... mov'd he この五行の意味は「R・
W にあっては、見て理解して行動することが余りにも迅速
なので即座のように思われる」【RA・四八五】

Fellham, *Resolves* "Of Death" l. xviii. の「対象を余りにも突然、奇想で捉えようと心の理解力は眼そのものの中に宿っている」と人は思ったことだろう」参照 [Ma・同]

(26) *Conceit* = Faculty of understanding 「理解力」[同]

(27) *thy few sands* R・Wの短い生命を示す砂時計。ここから六五行目までの込み入った表現の意味は「君が殺されたか捕虜になったかは私には分からない」[RA・同]

(28) *Prisner to some distant slye* この国のどこか遠く離れた所へ捕虜として [RA・同]

根本的に異なった解釈。ここで基本的なのは、魂は死によって「粘土質の住み処」から解放されると、創造された宇宙のどこかもっと洗練された所、例えば星などに居場所を見出すのだ、という新プラトーン派の考えだ [Ma・二〇六]

(29) *hurld* おそらへく whirled! 「へむぐる運び去った」の意味でか。この両語の連想については *OED* を参照 [RA・同]

(30) *but that...base Reprive* この二行「私は君が余りにも勇敢だったので自分自身を諦めたりはしなかったのだと信ずる」という意 [RA・同]

(31) *a base Reprive* 「捕虜になること」。

(32) *What ever 'twas...most suspect* 六一—六五行目でウォーンは、とにかく R・W が捕虜になったのではなく殺さ

れたのだと納得しようとした。彼は今や、R・W はどうい
う死に方をしたのか考える [RA・同]

(33) *a Cruil or the Common death* いずれにしても兵士としての戦死ではなかったということだろう。

(34) *I have/Failed in the glories of so known a grave* 参列すれば与えられたであろう榮譽を逃してしまった。価値ある大義のために戦場で己が身を犠牲にすることで名声は得られる、という作者の「というのは素朴にすぎる、この詩の語り手「私」の、である——本稿筆者」考えが表れている [Ma・二〇六]

(35) *Cold sheet* = shroud 「屍衣、埋葬布」[RA・同]

(36) *a sad delight* 撞着語 (oxymoron) 、「」までには到る複雑な感情の効果ある表現。

(37) *it = twiffe* 「芝生」。

(38) *Than all those Lordly fool* この次に 'can do for theirs' 「自分たちの名前と思いい出を貯えられる」を補って読む [Ma・同]

(39) *Marble-fraithes* 大理石で造られた、脆いもの（人間の骨）の集積、即ち、「大理石製墓」。こういう把握・表現が如何にも形而上派詩人の面目。

(40) *gilded blot* 墓石の表面に麗麗しく刻された碑銘。

(41) *hand / And pencil* 「大理石の墓を建てた」手と「碑銘を彫るのに用いた」鉄筆 [Ma・二〇七] [RA・四八六]

- (42) this my sorrow 「この詩で表現された私の悲しみ」〔R
A・同〕
- (43) common fate いつかは起る忘却。忘却の侵入について
のルネッサンス期の作家たちの執拗な関心は、世界は終り
に近づいていくとどう広まっていた理論の反映である〔M
a・二〇七〕
- (44) It may redeem thee to a fairer date 君を長い間「共通
の運命」〔忘却〕から救い出せるかも知れない〔同〕
- (45) As some blind Dial... There was a Sun Thomas Randolph
の詩集に付した Robert Randolph の献詩「親愛なる兄弟の
追憶に」の中の「そして日時計が、終った一日に／余り役
立たないが、太陽が出ていた、と告げられるように」を参
照〔M・七〇八〕
- (46) these = these verses 「以上のこの詩」〔Ma・二〇八〕
- (47) Nomen ... Conspicere ウェルギリウス『アエネーイス』
〔Virgil, *Aeneid*, VI, 507-8〕〔M・七〇八〕。アエネーアス
はこの言葉を、戦友であったデーイポボス (Diophobus
「トロイ王プリアモスの子で、パリスの死後その妻ヘレー
ネの夫となった。トロイ落城後、先に妻ヘレーネをパリス
に奪われたギリシヤの将メネラーオスに虐殺された」)の
見る影もなく損傷された姿に語りかける。

冒頭の二行と第二パラグラフの冒頭行との三行が十一音

節以外は全て一〇音節詩行の二行連句、総計一〇〇行の力
作詩。こたこたと特異に持って回った感じの表現故に尚更
「私」の悲しみが、胸にずっしり迫ってくる。締括りの引
用文が効果抜群で、見分けもつかない程損傷された友人の
死体を目にしてアエネーアスが魂を振絞るようにして発し
た一言が、この詩の主題で、読者は息を呑むしかない。

*参考文献

本誌『成城文藝』第二一一号(二〇一〇年六月)の拙稿末
尾(二四―三〇ページ)を参照されたい。ここには本稿での
直接参考文献のみを挙げる。尚、本稿中、「小考(一)」
〔小考(十三)〕は、本誌既連載の拙稿(第一九九号〔二〇
〇七年六月〕〜第二一一号)を指す。

〔続小考(一)〕「補遺と増幅―ヘンリー・ヴォーン、『火花
散る燧石』以後の」『成城文藝』第二二五号、19―47、二
〇一一年六月。

〔続小考(二)〕「思いは弱まることなく―ヘンリー・ヴ
ォーン『甦ったタレイアー』の世界」〔同〕第二二六号、
29―56、二〇一一年九月。

- 〔続小老(三)〕「対話精神の探求」——ヘンリー・ヴォー
 ン、呼応―初期と後期と〕〔同〕第二一七号、1—36、
 二〇一一年十二月。
- 『燧石』『火花散る燧石』 *Silex Scintillans* (1650, 1655)
- 『タレイヤー』『甦ったタレイヤー』 *Thalia Rediviva*
 (1678)
- 〔G〕 Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Student*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.
- 〔F〕 Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York University Press, 1965.
- 〔H〕 Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.
- 〔J〕 Leishman, J. B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- 〔JH〕 Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1854.
- 〔M〕 Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Ox-

ford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957. 本稿の底本。

〔M_a〕 Matilla, E. L. *The Secular Poems of Henry Vaughan*.

Uppsala, Harvard and Copenhagen, 1958.

〔RA〕 Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press, 1976.

〔T-〕 Tuttle, Imilda. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1969.

〔W-〕 Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

尚、一連の拙訳の〈〉付きは、原詩では大文字で始められる語句、コチック体は同じくイタリック体の部分である。原詩での固有名詞は全て大文字で始まるイタリック体なので拙訳ではカッコ無しの普通の字体のままです。